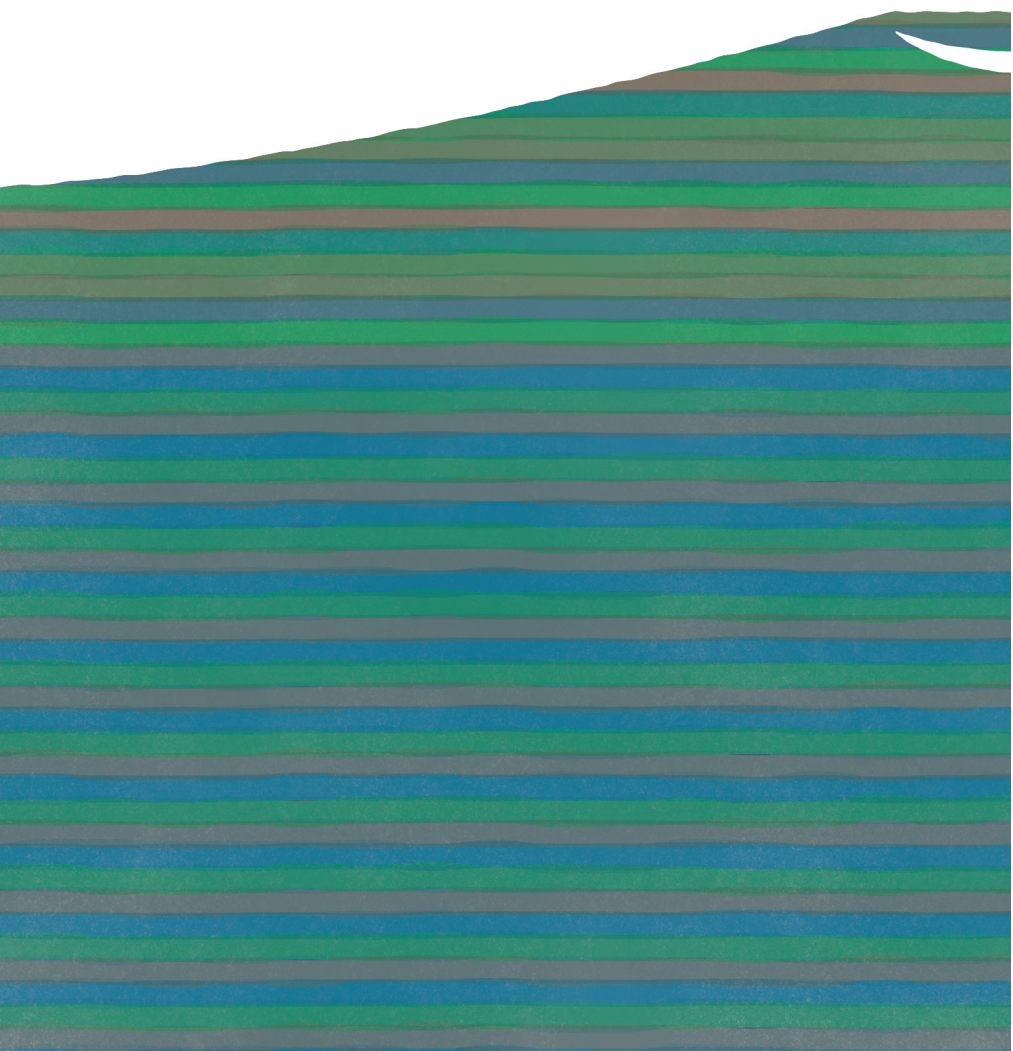


三宅島大学誌



# 三宅島大学誌



「三宅島大学」とは何だったのか

編・著:三宅島大学誌プロジェクト

(加藤文俊/奥麻実子/森部綾子/飯田達彦/深澤匠)



「三宅島大学誌」は、東京文化発信プロジェクトの事業として実施された「三宅島大学」をふり返り、まとめと評価を行う活動で、二〇一四年度のTokyo Art Research Lab (TARL)の「研究・開発」プロジェクトとして位置づけられています。

加藤研究室（慶應義塾大学）は、「三宅島大学」の準備から開校、運営、そして閉校にいたるまでの三年近くにわたり、もっぱら「調査・研究」という側面から、かわら版「あしたばん」の発行や「ポスタープロジェクト」をすすめ、三宅島の人びとの想いや生活の様子を記録してきました。そのご縁もあって、一緒に島に通った仲間たちとともに「三宅島大学誌」の編纂にかかわることになりました。

「三宅島大学」には、アーティストをはじめ、めとしてさまざまな人がかかりました。個々のプロジェクト、たとえば「一〇〇人先生」「そらあみ」などについては、すでに個別に成果がまとめられています。本冊子は、加藤研究室の立場から編纂されたものです。

紙幅の関係で、この三年間にわたる活動を網羅的に収録することはできませんでしたが、本冊子の編纂と並行して整えた「三宅島大学誌デジタルアーカイブ」には、写真や動画、音声ファイルなども含まれています。一部のページからリンクされている情報（アイコン表示については下記を参照）を参照することによって、「三宅島大学」の輪郭が、さらにくっきりと描かれるはずです。「三宅島大学」とは何だったのかを問うための、ひとつの「入口」になることを目指して構成しました。

「三宅島大学誌」は、「三宅島大学」のふり返りとアーカイブを目的に、本冊子とウェブサイトにもまとめられています。ウェブサイトには、両プロジェクトにおいて記録された写真や音声などのデジタルデータが掲載されています。

- ・「三宅島大学誌」デジタルアーカイブ | 冊子連動ページ  
<https://miyakejima-univ.make-archive.net/viewer/booklet/>
- ・「三宅島大学誌」デジタルアーカイブ | トップ  
<https://miyakejima-univ.make-archive.net/viewer/>

冊子内のアイコンは、ウェブサイト上の関連データの有無を示しています。ウェブサイトへアクセスすることで、冊子の内容を補足する情報を視聴できます。



写真



映像



音声



PDF



ブログ



「三宅島大学誌」とは	02
目次	04
はじめに(森司)	06

「三宅島大学」とは何か	10
-------------	----

「三宅島大学」の設計思想	12
主な活動紹介	14

視座をくらべる —関係者インタビュー—	22
---------------------	----

日比野 克彦	24	安野 太郎
五十嵐 靖晃	26	長島 確
山城 大督	27	西澤 徹夫
EAT&ARTTARO	28	
猪股 春香	32	上地 里佳
開発 好明	33	吉田 武司
		35 34

西村 ひとみ	38	田中 耕介
島崎 広光	39	築穴 美喜子
冲山 雄一	40	築穴 一也
		43 42 41

島をくらべる —伊豆三島リサーチ—	44
-------------------	----

大きな波をこえて(森部 綾子)	46
-----------------	----

方法をくらべる —「三宅島大学誌」公開研究会—	56
-------------------------	----

「三宅島大学誌」公開研究会クロストーク	58
---------------------	----

「三宅島大学」をふり返る	68
--------------	----

「三宅島大学」とは何だったのか(加藤 文俊)	70
------------------------	----

「三宅島大学」年表	104
-----------	-----

「三宅島大学」「三宅島大学誌」実施概要	116
---------------------	-----



森司（東京アートポイント計画ディレクター）

二〇一一年の春、私は後に「三宅島大学」の関係者になる面々に「島に行きませんか？」と声をかけていた。三宅村の池山秀利副村長（当時）から東京アートポイント計画が実施する文化プログラムの展開を要請されたのが、二〇一〇年の冬。それを受け具体的にどのような活動が可能かの調査と初打ち合わせの為に、二〇一一年二月に船に乗った。三宅島までの東海汽船の乗船券には「条件付き」と朱でスタンプされていた。六時間三十分後には下船するはずが着岸できず、八丈島まで行った復路での初上陸となった三宅島。十六時間程の冬の海の船旅でぐったりしたカラダに、しっかりと「条件付き」の意味を刻み込んだ。自分の三宅島の思い出は、いつもこの初渡航のエピソードに始まる。夏には、台風による欠航で島に足止めされて過ごしたりもした。そして「三宅島大学」に通う三年間で、島の生活のリズムをも学んだ。

「島に行きませんか？」の誘いに応えてくれたアーティストや研究者、学生の面々による島での沢山の貴重な経験の成果は、すでに個別にまとめられている。それらの活動を可能にした

「三宅島大学」という仕立てはどのようなものであったか。「大学」をメタファーとして使うこと、三宅島全体を校地とみなすこと、「島でまなび、島でおしえ、島をかながえる。」を理念とすること。そのようなフレームの設計は慶應義塾大学の加藤文俊先生にお願いをした。

その一方で私はアートプロジェクトを島で展開するヒントを得る為に、各分野の専門家（東京藝術大学関係者と日比野克彦研究室のアーティスト）に帯同をお願いした。二六名のリサーチチームで三宅島に入ったのは、二〇一一年六月のことだ。実質的な「三宅島大学」のキックオフはこの時なされたと思っている。

「三宅島大学」の三年間の活動を俯瞰し検証する振り返りを、「三宅島大学」の実施に尽力頂いた一番の当事者である加藤先生に引き続きお願いをした。プロジェクトの検証となる「三宅島大学誌」の監修と論考執筆の依頼は、「三宅島大学」が三年で活動を休止する想定にはなく、もっと長く深い展開の可能性を秘めたプロジェクトだった（と思っている）からだ。

「三宅島大学誌」編集チームによる「三宅島大学」年表は、いつどのような活動がなされていたか見て取れる。インタビューでは「三宅島大学」の初動に巻き込まれる形で参加してくれたメンバーの肉声当時の現場の断片を彷彿とさせる。活動に外から関わり見守ってくれていた島側の人たちのコメントは、「三宅島大学」が浸透していくまでに時間を要していたことや

期待していたことが何であつたかを改めて知らせてくれる。

「三宅島大学」のわかりにくさの理由を、加藤テキストが鮮やかに解析してみせる。「三宅島大学」とは何だったのかという振り返りから、「三宅島大学」が何に価値を置いて設計されていた試みなのかを明確に示す。ここで用意された言葉は、「三宅島大学」の企てを終わらせず、別の場所、別の機会での展開可能なものへと導いてくれる。

それにしても、「三宅島大学」という仕掛けそのものが、まさにこれから呼べるタイムミングで（とやはり自分は思っているのだが）、招聘した三宅村側の決定で終止符を打たれた。この結末を引き受けつつ、なぜそのような帰結したのかを問うことが、東京アートポイント計画のディレクターとして事業をスタートさせた自分がするべき「三宅島大学」の振り返りとなる。

「島に文化を！」のオーダーを受けて、「三宅島大学」の仕立ては文化政策の実行プログラムとして実施された。この前提を時々の担当者で共有し、当事者間協議と調整が深い次元でできていれば、違った結果になっていたのかもしれないという思いが残る。当初は村の五ヶ年計画に盛り込むことまで検討されていた本プロジェクトは、島の協力を得て必要な環境整備がなされていった。活動拠点として御蔵島会館が「三宅島大学」本校舎として整備されたのはその端的な一例だ。同時に体制が整うことで文化プログラムとして『一〇〇人先生』の開催が可能に

なり、具体的に分かりやすいプログラムの実施は、「三宅島大学」の存在や可能性を島内に伝えていくことになった。可視化された場と分かりやすいプログラムとの相乗効果で、意識の改善が明らかに進んだと思う。子供達に「三大（さんだい）」と愛称で呼ばれるようになった「三宅島大学」の活動は次のことを教えてくれた。一つは言うまでもなくアートプロジェクトやアートが指し示すところの理解の重要性だ。加藤先生はアートプロジェクトを明快に定義することで、アートとアートピースとアートプロジェクトとの混濁が起きないように整理して見せた。しかしながら「アート」という用語が個人的趣味趣向の表意行為として硬直した認識で理解された時には、逆にすべての可能性の道が凍結される。つまり、ステークホルダーへの啓蒙に有効な言葉の獲得が、アウトリーチ、ロビー活動のためにも急務ということだ。企画目的の理解を得る言葉を編み出すこともアートプロジェクトのメタテーマとなる。同時に、現場でプロジェクトの展開を自分ごととして熱量のある人びとが時間をかけて土壌を醸成させてこそ成功であるということ、公開研究会で呼び出した大南氏による徳島県神山町のケースをお聞きして痛感する。そして本プロジェクトの終了によって、オペレーションの設計から組み替えて扱うことのできるコンテンツの有り様を考えるヒントも得た。「三宅島大学」が「三大」と呼ばれるようになるまでのプロセスを成果として、「三宅島大学」の実施に関わり協力頂いた多くの関係者の方に感謝申し上げて、私の振り返りを終えたいと思う。



### 三宅島基本情報

- ・面積:約55.5km<sup>2</sup>
- ・周囲:約38.5km
- ・総人口:2,714人
- ・世帯数:1,742世帯  
(2015年1月現在)



### 三宅島と「三宅島大学」

三宅島は富士火山帯に含まれる火山島であり、2000年6月の噴火からさかのぼると、約20年周期で噴火を繰り返している。2000年9月の全島避難指示発令後、住民の帰島が叶ったのは、約4年半の月日を経た2005年2月のことだった。

島には海岸沿いを一周する道路があり、その周囲に、島民の暮らす5つの集落が点在している。「三宅島大学」本校舎は、阿古地区内の御蔵島会館を借り受ける形で2012年6月にオープン。地図内●印は講座の実施場所を示しており、本校舎をはじめとする島内全域で屋内外を問わず、その場の特性を生かした講座を行った。



三宅島大学  
MIYAKEJIMA UNIVERSITY

「三宅島大学」校章  
(デザイン:中西要介)

## 「三宅島大学」とは何か

東京から南南西へ約一八〇キロ。夜の竹芝客船ターミナルを出発し、フェリーで約六時間半揺られた先にある、三宅島。太平洋に囲まれたその火山島を舞台に「三宅島大学」は実施されました。

リサーチチームがはじめて島へ渡ったのは、二〇一一年六月。三ヶ月の準備期間を経て同年九月に開校し、二〇一四年三月をもって一時閉校となった「三宅島大学」。プロジェクトとしては短期間かもしれませんが、その間にも、さまざまな出来事がありました。

「三宅島大学」とは何だったのか。そこでの試みは何を生み、そこから何を導くことができたのでしょうか。

その問いを考えるにあたり、まずは約三年間の歴史をたどることから、はじめます。

## 「三宅島大学」の設計思想

「三宅島大学」は、三宅村、三宅島大学プロジェクト実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）の共催のもと、「東京アートポイント計画」（東京文化発信プロジェクト室における拠点形成事業）のアートプロジェクトとして企画された。「三宅島大学」は、二〇一〇年度の「墨東まち見世二〇一〇」および「学生とアーティストによるアート交流プログラム」参加企画として展開した「墨東大学」プロジェクト（同じく、東京都と東京文化発信プロジェクト室の主催による）から着想し、実現したものである。「墨東大学」が、墨東エリア（墨田区の北半分を占める地域）を対象にしていたのに対して、「三宅島大学」は、島全体というさらに広い範囲を「大学」に見立てるといふ点で大きくことなっていた。

近年、「〴〵大学」という名前を冠して企画・運用される学習プログラムへの関心が高まっているが、「三宅島大学」は「島でまなび、島でおしえ、島をかんがえる。」を理念に、講座や実習というかたちで、島にさまざまな「しかけ」を埋め込んだ。それは、学習プログラムであると同時に、コミュニティや地域を知るための方法でもあり、人びとのコミュニケーションを誘発することを目指していた。「大学」とおしてアーティストたちに創作活動や表現の機会を提供するとともに、島に暮らす人びととの交流・交歓の場をつくる試みでもあった。

言うまでもなく、学校教育法で定められた正規の大学ではないが、「大学」というメタファールをつかうことによって、入学から卒業までのプロセスを設計した。学生は、講座や実習に参加しながら、所定の単位（一二四単位）を取得すれば、課程を修了して卒業となる。一つの講座で取得できるのは四単位程度であるから、卒業のためにはくり返し参加する必要がある。その過程で、中長期的な紐帯が育まれることが期待されていた。また、講座等で一方的に知識を得るだけではなく、三宅島へも「何か」を還すべく、「卒業制作」を必修にした。「誰もが学生、誰もが教員」というコンセプトによって、私たちの学びたい欲求（知識修得）のみならず、教えた欲求（情報発信）をも満たすべく全体のカリキュラムを構想した。

「三宅島大学」は、二〇一一年九月に開校し、二〇一四年三月までの間、一〇〇近い講座が開かれた。卒業生は二名、それぞれ「三宅島モザイクアート」「Our Diary」というタイトルで卒業制作を行い、成果報告を行った。

（文・加藤文俊）

## 主な活動紹介

ここでは「三宅島大学」の開校準備期間から閉校まで、約三年の間に実施されたりサーチや講座の中から、主要なものをふり返る。

なお、そのほか全ての講座については巻末の実施概要（116～118頁）にまとめられているほか、「三宅島大学」ウェブサイトでその詳細を見ることが出来る。

<http://www.miyakejima-university.jp/courses/>

## 第一回開校準備リサーチ

実施日…二〇一一年六月一八日～二二日

参加者…東京藝術大学日比野克彦研究室  
慶應義塾大学加藤文俊研究室 ほか

リサーチチャーター全二六名が三宅島に初上陸。各々の手法で島内をリサーチし、最終日に成果報告会を開催した。大人数を一度に島に放つというリサーチ手法が、印象的なプロジェクトのはじまりとして、後に多くの関係者の口から語られた（22頁以降「視座をくらべる」参照）。



写真：喜多直人

## 開校式・キックオフレクチャー

実施日…二〇一一年九月一九日

講師…加藤文俊 ほか

三宅島・錆が浜駐車場にて開校式を実施。当時の村長による開校宣言からスタートした式典では、安野太郎（29頁）作曲「1000年のこども」のハンドベル演奏も披露された。その後、キックオフレクチャーとして加藤文俊「島でまなび、島でおしえ、島でかんがえる」を開講した。



写真：喜多直人

## 開校記念講座

実施日…二〇一一年九月一九日～二五日

講師…日比野克彦（24頁）／近藤良平 ほか

開校式からの七日間で、開校記念講座として十一種の特別講座を連続開講。波打ち際を散策しながら岩場や水中の絵を描く「Rock'n'dive」（日比野克彦）や、三宅島の自然を感じながら身体を動かす「溶岩ダンスワークショップ」（近藤良平）などを実施した。





あしたぼんプロジェクト

実施日…二〇一一年六月一九日  
 講師…加藤文俊研究室

三宅島大学の講義を取材・執筆・編集して大学の活動を伝えるかわらばん『あしたぼん』を発行するプロジェクト。数回を講座化した。二〇一一年六月の第一回三宅島大学リサーチ時より継続して制作し、号外を含む全六十号を発行（二〇一五年三月現在）。



ポスタープロジェクト

実施日…二〇一一年九月二一日  
 講師…加藤文俊研究室

島で暮らす人びとの取材や写真撮影を行い、ポスターを制作するプロジェクト。数回を講座化し、受講生と共に制作した。「女将さん大集合!」「キッズ大集合!」「はたらくオトコたち」のシリーズ全七二枚を制作し、島内と竹芝客船ターミナルでの展示を実施した。



カフェ三宅島

実施日…二〇一一年十月四日  
 二〇一二年十月二一日  
 講師…EAT&ARTTARO (28頁)

コーヒーを飲みながら三宅島の食について語り合う場所として「カフェ」と名付けた講座を実施。開校記念講座以降初の講座として、まずはリラックスした雰囲気の中で島の人びとと語らうことを目指し、後につながる関係を構築するきっかけとなった。



三宅島大学通信

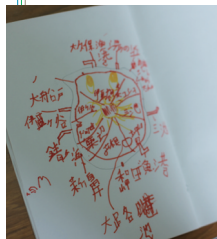
実施日…二〇一二年八月一日  
 配布場所…島内各所

三宅島大学事務局による、大学レポートと毎月の実施予定講座についてのニュースレター。マネージャーの着任により制作を開始し、二〇一二年八月から閉校までの期間、毎月一日に発行した。紙ベースでの定期的な情報発信により、大学の情報が島内へ浸透することをねらった。



実施日…二〇一二年八月一八日～二六日  
二〇一三年八月一二日～一八日  
講師…加藤文俊研究室

夏休み中の島内の子供を対象としたプロジェクト。  
午前中は正解のある授業として、夏休みの宿題をサポート。午後には正解のない授業をテーマに、ワークシヨップ形式の講座を実施。カメラなどのツールを用い表現する楽しさを知る機会を提供した。



実施日…二〇一二年九月六日～九日  
講師…長島確(30頁)

長島確主宰『アートレウス家』(ギリシヤ悲劇に登場する家族の物語を借りながら、演劇の発想を使って、住まいや暮らしを再開発するプロジェクト)シリーズの一つとして上演。  
主催は、東京都、東京文化発信プロジェクト室、一般社団法人ミクストメディア・プロダクト。



写真:富田了平



実施日…二〇一二年十月六日  
講師…五十嵐靖晃(26頁)

開校準備リサーチ時に島のベテラン漁師に習った漁網編みの技術を、漁網を空へと編み上げるアート作品『そらあみ』へ昇華。  
三宅島にて生まれた本プロジェクトは、塩竈や浅草など各地で展開。再び島へと「戻す」意味を込め、三宅島での滞在制作と展示を実施した。



実施日…二〇一二年二月三日  
講師…開発好明(33頁) / 一〇〇人先生

「誰もが先生、誰もが生徒」を合言葉に、人びとが持つちょっとした特技に焦点を当て、それを教わる連続講座を開講。  
一人目の「釣果次第先生」から一〇〇人目の「ほこら巡り先生」まで、バラエティに富んだ一〇〇人の先生が誕生した。



実施日…二〇一三年五月九日  
 講師…山城大督(27頁) / 有佐祐樹  
 / 戸館正史 / 富田了平

「七年後の自分に送るビデオレター」というテーマで、全三八名のビデオレターを撮影。先行して声のみを録音し、それを本人が聞く様子を撮影するという手法を開発。制作を行った。

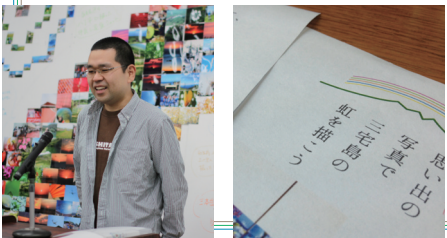
制作されたビデオレターは公開されず、本人にのみ手渡された。



実施日…二〇一三年十一月十七日  
 卒業生…田中耕介(41頁)

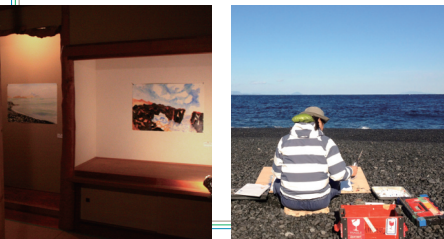
初の卒業生・田中耕介さんによる卒業制作「三宅島モザイクアート」をお披露目。田中さんは同作品において、さまざまな人びとが撮影した島の写真を集め、大きな虹を描いた。

またその発表をもつて三宅島大学を卒業となった田中さんへ、卒業証書を授与した。



実施日…二〇一四年一月五日〜一九日  
 企画 / 制作…日比野克彦(24頁)

一月五日〜六日の二日間、三宅島内各所での公開制作を実施。第一回開校準備リサーチで行った海中でのスケッチに続き、今度は陸地からの目線で島の雄大な自然と対峙。その場の力を体にとりこむことで生まれた八枚の絵を、三宅島大学本校舎に展示した。



実施日…二〇一四年三月九日  
 卒業生…笹井美由紀

第二期卒業生・笹井美由紀さんの卒業制作「Our Diary」の成果発表を実施。その後、卒業証書を授与した。

閉校式では、加藤教授ほか多くの関係者からのコメントを読み上げ。御蔵島会館に掲げられていた本校舎の看板を取り外し、三宅島大学は一時閉校となった。



## インタビュー実施概要

インタビュー対象者は、大きく以下の属性に分かれている。  
それぞれの立場から、「三宅島大学」との出会いや、プロジェクトを通しての印象について話をうかがった。

## リサーチャー

短期間／複数回三宅島へ渡り、リサーチや講座などを実施したメンバー。その多くはアーティストであり、それぞれが三宅島以外の場所でのプロジェクトを経験している。

また、今回登場する7名の内EAT&ART TARO氏をのぞく6名は、開校準備リサーチ(14頁)に参加したメンバーでもある。その中で、五十嵐氏／安野氏／長島氏／西澤氏には同時にインタビューを行い、当時のエピソードを中心に聞き取りを行った。

## マネージャー／事務局

数ヶ月間三宅島に滞在しながら「三宅島大学」の運営に携わったメンバー。マネージャーは「三宅島大学」本校舎(御蔵島会館)に常駐し、事務局員は役場の職員として勤務。それぞれの立場で島との関係を築き、リサーチャーと島をつなぐ役割を担った。

猪股氏には、インタビューの後に別途テキストを依頼。それを再編したものを掲載している。

## 島民

三宅島に暮らす人びと。島民の中にも、島内出身者と島外からの移住者とが存在する。

今回は、島民の中で「三宅島大学」の教員／学生として関わりのあった方々へインタビューを依頼。自身の話に加え、周囲の反応や、島や島内の地区の特性についても教えていただいた。

(インタビュアー:加藤文俊／奥麻実子)

## 視座をくらべる

### — 関係者インタビュー —

「三宅島大学」はプロジェクトであり、学校教育法上定められた正規の大学ではありません。それを学びの場としての「大学」たらしめていたのは、教員であり学生でもある、多くの「人」の存在でした。

リサーチャーとして短期的に島へ渡った人や、マネージャーとしてある期間を島で過ごした人。そんな来訪者たちを迎え入れることとなった、島に暮らす人。さまざまな形で「三宅島大学」との接点をもった人たちは、そこでの出来事をどのようにとらえ、そしていま何を想うのでしょうか。それを知るために、数名の方々へお話をうかがいました。

それぞれの目線を重ね合わせることで、「三宅島大学」と三宅島の姿が、新たな側面をもって浮かび上がります。



三宅島大学教授

## 日比野 克彦

アーティスト。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。  
「三宅島大学」立ち上げ時の企画監修を行ったほか  
「教授」として開校記念講座「Rock'n'dive」(15頁)や  
公開制作/個展「場の力」(21頁)を実施した。

森さんからどこかの島

に行くような話を聞いて、だったら絶対呼んでよね、みたいに言ったんだよね。どこか東京都の島なんだろうなと予想はして、行けば(海に)潜れるな、と。その前から『水中スケッチ』(スキューバダイビングの装備で海へ潜り、海底のスケッチをするプロジェクト)は何度かしてたから、島に行くならまたやってやるぞ、みたいに勝手に思った。三宅島だっけ、聞いたのはその後だったけど、行ったことはなかったから、これをきつ

けに行ってみたいな、と。

それで、一番最初から大人数で行ったのか。それぞれがリサーチして、最終的に発表して。そのリサーチだけで終わっちゃったやつもいるけど、みんないろいろやってたな。金澤宏紀\*が島の土を焼き物にしたり、松田唯\*は近所のおばちゃんたちに布を集めてもらって衣装をつくって、それを着て上地由衣\*が踊ったり。その一方で、橋本匠\*は急に島を走り出し(笑)。村上慧\*も島を一周したりして、あとは喜多直人\*もいた

んだよね。

そうやってパラシュートみたいにいきなり島に降り立って「すみませーん」「はじめましてー」みたいな感じで入っちゃう、その手法はアリだねって話はしてたね。それでやっぱり火傷もしたんだけど(笑)。佐藤悠\*がいきなり三宅島高校に入って行っちゃって、この先生に見つかって、なんだ「三宅島大学」ってのは、聞いてないぞ、みたいになつたりさ。でもそういう風にはリサーチヤーを島へ解き放って、じゃあ行け！ みたいな

イメージができたのは、島だったから。島から出れなかったからかもしれないな。あれがたとえ(新潟の)妻有の山の中

だったから、ちょっとできなかった。

そういういきなりのところから入って、また三年目に島へ行って思ったのは、上地(34頁)と吉田(35頁)がずいぶん地元になじんだなってこと。なじみすぎて、鳥の人と朝まで飲んでつぶれて、俺が港に着いたと

きには誰も迎えに来なかった(笑)。そこまで仲良くなったんだな、と。よしよし、みたいに思ったね。

ほかの場所と三宅島は、なんか違うんだよね。やっぱり噴火があって、全島避難があつて、戻って来たけどまたいつかそれが起こるだろうってのがある。よく「限界集落」って言い方をするけど、三宅島にはそんな考え方ないもんな。人間が脈々と繋いでいくものよ

りも、それ以上の力が島にはある。だから当然限界はあるでしょ、みたいな。人間がいくらがんばったって、全員がいなくならなくちゃいけないと

さがあるっていうさ。そういうキワに住んてる中で、たとえば瀬戸内の島とかと比べると、長期的な計画を立てて難いっていう精神性みたいなのは感じたかな。でも長期的計画でどうこうっていうより、人間以上の力と背中合わせで暮らしているっ

ていう、そこから得られるものがあるだろうと。そういうのがきつと三宅島大学の、自然災害大ニッポンとしての学びになる。だから俺も最後(個展「場の力」で)自然ば

っかり描いてたからね。「三宅島大学」の看板は一回外したけれども、島から学ぶべきことはたくさんある。だから俺としては、今後もぜひ三宅島に行きたいなって思ってます。

\*印は全てリサーチヤー名。「三宅島大学」ウェブサイトで、それぞれのプロフィールを見ることができる。

<http://www.miyakejima-university.jp/staff>



## 山城 大督

美術家・映像ディレクター。

「三宅島大学」では、2011年度に広報チームとして活動。2013年度は映像プロジェクトとしてメンバーを主導し「VIDEO LETTERS」(20頁)を企画/制作した。



最初は作家としてではなく、プロジェクトの撮影をしてほしいということで島へ行きました。そこから「三宅島大学」そのものをつくる方に参加してみないかと。それでデザイナーと編集の人とそれを一緒に考える僕と、三人で広報チームとして入ったんです。もう開校日は決まってる、そこに向けてやれる範囲から一三〇%くらい考えて、どこまで落とすか、みたいな。それはめっちゃ楽しかったですね。

でも開校式の後は運営にはあまりタッチしてなくて、ちょっと関わりが薄くなっていった。三年目にまたお誘いをいただいて、映像のプロジェクトをやりたいです、と。当時はビデオレターなんて話は一切なくて、映画とか映像作品をつくりたいって考えてましたね。そのときは「三宅島大学」の先生ですっていうよりも、アーティストとして自分の作品をつくらう方が島に流通するんじゃないかって思ってた。だから講座としてやってるっていうよりは「三宅島大学」という架空の大学の中のアートプロジェクト

とみたいな感覚でした。一年目にも感じてた窮屈さというか、自分と島っていう一対一の関係になっちゃう感じ。それは三年目の方があつたかな。ふつうはそんなこと考えないじゃないですか。自分と東京とか、それと自分がどう関われるのかなんて。なのに三宅島はそれを考えなきゃいけない気にさせる。それは島だからなのか、三宅島っていう個性がそうさせているのかはまだわからないけど、最後までそれは感じ続けてたんです。

## 五十嵐 靖晃

アーティスト。

土地に住み、その日常に入り込み、そこで出会う人達と共に、普段の生活の中に新たな視点と人の繋がりをつくるプロジェクトを展開。「三宅島大学」では「そらあみ」(19頁)の制作や展示を行った。



森さんから話が来ると、だいたい遠くの現場なんです。パラシュート部隊として、ある意味未開の地、関係性のない土地に降り立つことになる。今回も電話で「島あるけど行かない？」みたいな、連絡というかミッシヨンが来たんです。最初のリサーチは、やり方がおもしろかったですね。嗅覚とか感性が全然違う人たちが同時に島に放たれて、それぞれが自分なりに獲得してきた情報であったり出会いであったりを持ち寄って。みんな全然違うものに興

味を持って集めてくるんだけど、夜な夜な飲んで話をしていると、一晩ごとに三宅島が浮かび上がってくる。そのスタイルは、すごいインパクトに残ってますね。そうやってみんなが島を回っている間、自分は座って網を編んでました。漁師さんに会いたくなって船小屋をのぞいたら、じいに会って。その時は人の手で網が編めるってこと自体わかってなかったのも、おもしろいなど。じいに直接指導を受けながら、編んだり、間違えて解き直したりっ

ていうのをひたすら繰り返して。じいとか、じいに会いに来る人との対話を通して、そこに居続けたりリサーチができた。島の人たちがどういう風に噴火する山と向き合っていて、うまく付き合っているのかみたいな。時間の流れもそうだし、雨とか風の音とか、編んでいると聞こえてくる耳に入っていく感覚。そういうのは、すごく懐かしい。だから自分にとってはだぶん、編むっていう行為が三宅島への入口だったのかなって。今振り返って思いますね。

リサーチャー

## 安野 太郎

作曲家。東京藝術大学非常勤講師、日本大学芸術学部非常勤講師。  
「三宅島大学」では、主に音楽を専門とするリサーチャーとして関わる。  
開校式では、島の富賀神社大祭のリサーチを元に作曲した楽曲  
「1000年のこども」(15頁)を学生+島の有志の方の演奏で披露した。



きっかけは六月、最初のリサーチのほとと一週間前とかかな。大内さん(東京文化発信プロジェクト室)と話をしていた、今度三宅島に行くみたいな話を聞いて。

実は三宅島には全然別の企画で、二〇〇七年くらいに二、三回行ったことがあったんですよ。そのときに、もうなかなか行く機会はないだろうなと思っていましたから、もう一回行けるんだったら行ってみたいなと。それで連れてってよという話をしたら連れてってもらえた、という感じです。

行ってみて感じたのは、緑が増えたなって。俺が行った二〇〇七年って、ほんとにもう真っ白だったんですよ。木とかもガスで枯れてしまってたんですけど。あのガスの濃い、三池港の方なんて特に。あーだいたい緑は増えたなあ、良かったなあ、っていう。そういう懐かしさみたいな気持ちはありません。

ハンドベル(開校式で披露された『一〇〇〇年のこども』)の練習は、どんなムードだったんだろうなあ、あんまり覚えてなくて。でも、一周するお祭り(富賀神社大祭)があったじゃないですか。あれの太鼓のリズムをひたすら耳コピして、楽譜を書いて、『あしたばん』に送ったのはすごい覚えてるんですよ。それをしているときに、ああなんか過去の巨匠がやってきたことを俺もやってるんだな、って思っています。民族音楽みたいなのに注目して、それを採譜しに行くっていう。歴史をトレースしてるなっていうのを感じて、ちょっと嬉しくなりましたね。

リサーチャー

## EAT&ART TARO

食をテーマに現代美術の活動を行う作家。  
「三宅島大学」では、「カフェ三宅島」(17頁)や「Welcome Coffee」(107頁)などを通じ島の人びとと交流を深める。  
また1人目の「100人先生」として「釣果次第先生」を担当した。



三宅島って婦人会がちゃんとながっていて、コンパクトだし結束も強い。なのでそこを紹介してもらって、仲良くなってみようってところから始めたんです。最初はちょっとコーヒー講座みたいなふりをして、こうやって淹れるんですよ、って。そういうふりをしつつ、お話を聞いてお菓子を食べるみたいなの。

そこから婦人会の、民宿のおばちゃんたちと付き合ってたので、そこにある地域の問題みたいなのはなんとなく見えてくる。でも意外とそこじゃないことをできた、っていうのはおもしろくて。地方に行くとすぐB級グルメを作りたいとかいう話をされるんだけど、三宅ではそうはならなかった。ほかの地域とは、少し問題の段階が違うかもしれないですよ。名物一個でできればなんかいけるとか、もうそういう感覚じゃないのかなと。問題はあれけどすごく距離があって、僕には何もできない。じゃあコーヒー飲んで遊ぼう、みたいな(笑)。その距離感だからこそ、逆にアーティストらしい振る舞いになれた

んじゃないかな。最初三宅に行ってた頃はまだ僕の中ではっきりしてなかったんだけど、いろんな地域と関わってみて思うのは、アーティストはその場所の何かを叶えに行くわけではないってこと。それがすごい大事だなあと。ニーズがあると応えたくなくなっちゃうけど、それはアートとかアーティストの役目じゃないと思っ

て。まあ、役に立つことなんてできないんですよ(笑)。あんま役に立とうとしちゃダメだなんて思いますね。



## 西澤 徹夫

西澤徹夫建築事務所、東京藝術大学教育研究助手。

ふだんは建築設計、展示デザイン、舞台美術などを手がける。

「三宅島大学」では主に環境整備の面からプロジェクトの運営に関わり島の建物や遺構のリサーチなどを行った。



最初のリサーチの頃は震災のすぐ後で、結構参った時期でもあったんです。建築でできることって、それまでの価値観がガラッと変わっちゃったっていうのもあって。南三陸の方にもしばらく行ってたんですけど、僕は三宅島を東北の十年後ぐらいの感じで見ていて。災害があった十年後に人が戻ってきて、どういう風にコミュニティが戻りつつあって、そこにはどういふ問題があるのか。そういうことが東北の話とリンクできるのか

なって。そういう自分とか東北の問題をちよつと考えたくなっていうきっかけで、リサーチに参加していました。山が真ん中であって道が海岸線を一周しているっていう、その地形に僕は一番びっくりした。それが島の人に及ぼしている、文化とか心理的な影響があるだろうなと。島を縦断できないわけで、必ず回って行かないと、反対側の集落の人と交流を持てない。そういう島の構造をうまく拾っていったら、すごくいいもの、楽しいものができないか

なっていうのを最初に思いました。でも他のみなさんが自分の身体を使って割とすぐものをつくれるのに対して、建築ってなかなかそういうわけにいかなくて。自分の身ひとつではなかなか何もできない。建築の鈍重さというか、そういう仕事なんだなってことは痛感させられました。だからリサーチ中の五日間はいろいろ、あでもないこうでもない、でもああした方がいいのかなっていうのを考えながら、それでもいろいろ調べてたって感じですよ。



## 長島 確

ドラマトルク/翻訳家、東京藝術大学講師。

「三宅島大学」では講座「いろいろな地図・それぞれの地図」を開講。地域ベースの演劇プロジェクト「アトレウス家」シリーズを主宰し三宅島でも「三宅島在住アトレウス家」(18頁)を上演した。



最初に三宅島に行くって話は、たぶん二〇一一年の五月くらいかな。大人数で三宅島のリサーチに行くけど、それに加わらないか、と森さんからお話をいただきました。ただ、初日にみんなと一緒に、っていうタイミングでは島へ入れなくて、僕と安野さん(29頁)は一日遅れて行っただけです。安野さんと二人で船に乗って、翌朝着いて、山城さんが迎えに来てくれてるはずがない。待合所にいる間にほかの旅行者の方とかはみんな迎えがきて、我々

二人だけになって。そんなスタートでした(笑)。その時点でリサーチはもう始まっていて、島に数十人がいきなり来て散っている、って状況がもうできている。それはなんだかすごいおもしろいと思いましたが。そのときに森さんから「一緒に行動してもいいけど、それよりいろいろ見てみたら」と。そこに合流してもいいし、あるいはまた別に行動してもいいんだ、みたいな感じがすごいおもしろいなあと。今考えたら、すごいリスクだったなとも思います

けど。でもあれだけの人数をいっぺんに野放しにしてしまうっていうのは、やっぱり画期的なりサーチというか、スタートの方法だったんじゃないかなっていう風には思いましたね。行く前にはまだ、三宅島でアトレウス家をやるって考えはなかったんです。行ってる間か行っただけに話をしていて。向島でやって豊島もやったから、じゃあ今度は本当に島でやるか、みたいな。そんな半分冗談みたいな話の中から、構想が出てきた気がしますね。

## 開発 好明

日常にあるもの、出来事や関心をモチーフに、インスタレーション、パフォーマンスなどを行うアーティスト。

2012年12月よりマネージャーに兼任、『100人先生』(19頁)を通じて「三宅島大学」の存在を島に広く浸透させた。



森さんに声をかけられたときには「三宅島大学」のことは知っていて、何をやっているのかはよくわからなかったものの、島に行けるっていうのは興味がありましたね。

最初は「作家」として島に渡る予定だったので、すが、出かける少し前に、いわば抱き合わせのような感じで「マネージャー」として常駐することになりました。僕は行った先々でいろいろつくるのが好きだし、マネジメントの仕事は初めてだけどそれぞれも楽しいかな、という感じで。

やっぱり若い人から年配の人まで、男性の参加を促すのが難しかった。「講師」として招く場合はともかく、新しい文化やイベントの形に対して、ちょっと自由度が少ないような。だいたい集まるのはおぼちゃんたちで、横のつながりが強いので、一人が来るとわあーっと集まる。いかに幅広い人に来てもらえるかっていうのは、難しい問題でした。でも、難しいからおもしろかったのかな。

僕の場合は前任の猪股さん(32頁)から引き継ぐことも多かったので、

ゼロからのスタートじゃなかったものの、他の地域で見えてきたように、地元の人たちがまとまって何かをやるうっていう勢いが、三宅島ではあまり感じられなかった。

『100人先生』は「誰でも先生、誰でも生徒」っていう「三宅島大学」のコンセプトに合っていましたね。後半になって勢いづいた感じはあるけど、やっぱり時間をかけて理解されていったと思います。もう少し時間をかければ、より熟成して、もっとおもしろくなるはずです。

## 猪股 春香

さまざま土地の住民になり「おかみ」としてアーティストや研究者を迎え入れ、地域の人や場所とつながりアートコーディネーター。

2012年7月～12月まで「夏の若おかみ」として「三宅島大学」初のマネージャーとして三宅島大学本校舎に常駐した。



知り合いから「島に興味ある？」と聞かれて「すごく興味あります」と伝えたら、後日森さんからあいさつ程度の簡単な連絡をいただいていた。その後あまりやりとりもないまま、三宅島に行く当日に初めて竹芝でお会いしました。自分でも、それでは本当によく行ったな。でも、森さんのこのプロジェクトに関われたら絶対おもしろいだろうし、こんな機会ももう無いだろうと思っただけです。

私にとって島での時間は、今まで経験したとは全く違うものでした。

一番印象に残っているのは、三宅島に流れる、大人も子供も関係なく島の人びとが持つ独特の「距離感」。島という環境から連想する、狭いコミュニティの中の密な関係よりも、もう少し繊細な感覚なのです。近づきすぎるわけでもなく、探るでもない、お互い(の違い)を尊重し合うところが見え隠れする間合い。その絶妙な距離感は排他的であったり、よそものを突き放したりするようなものではなく、私が島を離れる時、驚くぐらい号泣してしまふ、じんわりと

あたたかいものでした。今になって考えると、それは三宅島の人を持つ、時に厳しい「自然」と向き合う感覚と同じなのかもしれない。

半年間島で生活した私自身にも、その感覚が少しずつ伝染していたように思います。そして、その感覚のまま本州に帰ると「やはり(人と人との距離が)絶妙に近かった」ことに気づかされ、その距離感が今の私とまわりの人との間でも心地よく続いていることに、やはり、じんわりとあたたかく感じるものがあります。

## 吉田 武司

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科卒業。  
博物館勤務やアートプロジェクトへの参加を経て、  
2013年4月より三宅村役場の職員に。  
行政の立場から「三宅島大学」の運営に携わった。



二〇一二年の秋に森さんから「三宅島大学」の役場の担当を探している、と聞いて。それまでは埼玉のNPOで、行政からの依託を受けてアートプロジェクトを運営していたんですが、行政側の判断がどう下されているのかが全く見えなかったんです。行政の立場からアートプロジェクトに関わってみたいと思っていたので、その場で行くことを決めました。

役場では、応援したいけど関われないっていう人がいたり、「三宅島大学」の話をするとう口をつ

ぐんでしまったり。引き継ぎもびっくりするほど何もなかったんですよ（笑）。まあこういうもんだよな、と思いがらやってたんですけど。

最後の方で役場の人に、君はなんだかんだずっと現場側だったね、って言われたことがあって。役場の立場で物事を判断するというよりは、現場の視点を役場の中に持ち込んでいた、ということだと思っんです。逆に現場の人が行政と組むときに必要なのは、仕事としてというよりも、人としてどう引き

込むか。役場の人の知識をいかに現場に落とし込んで、どうその気にさせるかなのかな、という気はしています。

二〇一四年に日比野さんが来たときに、事業は続かなくても通えばいいんだよ、と言われて、それはそうだなと。個人から関わり始めてプロジェクトが立ち上がっていくのが本来の形なんだろうなと感じて。それから島にプライベートで行くようにしていて、そこから何か生まれていくって思っているのは、すごく思っています。

## 上地 里佳

慶應義塾大学大学院の修士課程で加藤文俊研究室に所属し、「三宅島大学」の立ち上げ時よりプロジェクトに携わる。  
島で住み込みのアルバイトをするなど早くから関係性を構築し  
2013年10月よりマネージャーとして再び島へ渡った。



二〇一三年の夏に大学の卒業が決まって、その報告に三宅島に行って。帰ってすぐに加藤先生からメールが来たんです。新しい「三宅島大学」のマネージャーが必要になりそうだと。

それまでは学生としての立場だったのが、卒業してすぐ、しかも仕事として三宅島に関われるんだってかなりおもしろいなあと。それで九月に卒業して、十月からマネージャーになりました。

最初はほんと戸惑いがありました。それまで三宅島の人たちとの関係性をつくることに重きを置いていたのが、マネージャーとしてアーティストとやりとりするってなったら、すごく大変で。アートの知識が全然足りない劣等感から、自信を持ってアーティストと喋れなかったり。初めてのことに弱音もたくさん言っただけど、そのぶん学ぶことも多く、とても鍛えられました。

「三宅島大学」が終わるってなったとき、続けるか続けないかって議論が私と吉田さん（35頁）の間であつたんです。村としてはもうやらないけれど、終わってからも、細く長く。（三宅島との関係は）もう切れないくらいになっちゃったんですね。

ど、終わった後も島にいて何かしら事業をするとは不可能ではない。でもいろんな地域を見てみたい気持ちもあつたし、島に居続けることができなくても、それで関係性が途切れるわけではない。確かにプロジェクトとしては一旦お休みになるけれど、これからは行けばいいんだ、って。そこからはいかに「終わる」か、ということに前向きになれました。







三宅島・伊豆地区在住

## 島崎 広光

三宅島観光ガイド。北海道出身。  
過去の文献や古老の方々の話を頼りに島を歩き、  
神社巡りのガイドブックとなる『三宅島の神々を訪ねて』を制作。  
『ほこら巡り先生』として『100人先生』の最後を締めくくった。



伊豆地区の自治会長として開校式と呼ばれたのが、「三宅島大学」を知ったきっかけでした。その後講座にも参加しましたが、私には正直物足りなかつた。大学の講座というよりは、サークルのようなね。村民の参加者がほとんどいなかったことも残念でした。参加するメンバーはいつものたい同じ。そうになると、「三宅島大学」というものは島にとってプラスだったのかどうか。ただ、女将さんなどのポスターシリーズは素晴らしかったと思います。

島の人口は、六五歳以上が三割を超えています。そういう人たちは、なかなか外へ出たがらない一面もある。それをしようがないとあきらめるのか、どうするのか。たとえば彼らと呼ぶのではなく彼らのところへ行つて昔の話を聞いたり、それを講座にしてもよかつたのかも知れません。私は就職を機に北海道から東京へ出て、三宅島にも赴任していました。そのころからあわせて、島に住むのは十一年目。でも島の自然については、村民の誰よりも詳し

い自信があります。島の人にとってはあたりまえの生活の場でも、私からすると本当に魅力的な風景がたくさんある。そういったものを、島の人にも外の人にもぜひ気付いてもらいたい。「三宅島大学」が終わってから、それを残念がる声も聞きました。また同じようなことをするのであれば、もっと島が持つ自然や力を活かせるのよいですね。「灯台下暗し」とも言うように、外から来た目だからこそ見えるものもあるのではないのでしょうか。

三宅島・神着地区在住

## 西村 ひとみ

三宅島ネイチャーツアー mahana 専属ガイド。奈良県出身。  
噴火前にイルカのガイドとして三宅島で暮らし、噴火後再び移住。  
『三宅島大学』では『三宅島ネイチャーウォーク』をはじめ  
島内外の人へ三宅島の自然とその魅力を紹介した。



一年目は島民としても認知度が低くて、何をしてくれるのかわかんないみたいな感じで。三宅島でやる必要はあるのかなとか、島とどう融合していくんだらうって。でも二〇一二年の夏に自分もネイチャートレッキングの講座をやらせてもらって、それでだんだんわかってきたというか、身近に感じられるようになりまして。講座ではないもののガイドと違って、島に住んでいる人がお客さん（受講生）で、私よりきつと知ってることも多い。島の人に昔のこと

とかを聞かせてもらって、自分もそこで学びながら、自分の知っていることを話す。共有、って感じでやれたんですよ。「三宅島大学」のコンセプトの一つである「自分も自分で自分も教えられる」的なところはいいなと思つたんですね。そういう意味で『二〇〇人先生』も印象的でした。都とか行政と島民をつなぐ人の存在が、「三宅島大学」にはとても大きかつたんじゃないかな。マネージャーの人柄ありきで、カラーも全然違つたんだらうなと思うんで

す。地域の人とコミュニケーションをとって「三宅島大学」を誤解した人とか興味はあっても機会がなかった人が来れるようになったり。島の子供たちも、学童に来ないのに「三宅島大学」には行ってたりして（笑）。一年半か二年目くらいから、島にも溶け込んできた感じがあつたんですね。でもそのタイミングで閉校、っていう。規模は縮小したとしても、なんか違う形で、細々ともやれることがあればいいのになって話したりもしたんですね。

三宅島・坪田地区在住

## 田中 耕介

「三宅島大学」開校時より継続的に講座に参加を続け、2013年9月、「三宅島大学」初の卒業生に。関係者から「ころっち」の愛称で親しまれ、「100人先生」では「麵打ち先生」として手打ち麵を振る舞った。



正直「大学」って最初に聞いた印象は、なんだろう、ですよね。でも写真の講座があるし、ちょっと行ってみるか。講座を受けて、単位をもらって、ログシートを見ればわかった。島の人にも、とにかく一度参加してみればすごい楽しいよって、このことを知ってもらえればと思っていました。卒業は最初からするつもりで、自分の受けたい講座というよりもとにかく休みが合えば行こうって。最初は島の人が多かったですけど、しばらく講座が空いたらメンバー

が変わって、最後の方は赴任している人たちが来るようになったのかな。僕がずっといたのは単位を稼ぐって他に、アーティストっていう人たちと絡めたりするのがおもしろかったんです。逆に島の人の、坪田弁の講座とかも刺激的でした。島民じゃなかなか目をつけないところに改めて触れて、結構すごいところにいるんだなって思ったりできて。やっぱり「三宅島」大学だから、そういう講座はよかったんじゃないかな。

あとは「キッズリサーチ」も素晴らしく、あれだけでもずっと続けて欲しいくらい。子供たちが触れ合える、二十歳前後のお兄さんお姉さんって島にいないんです。そういう人たちと学べるっていうのは、本当にいいなって思いました。自分で言うのも何ですけど、あのスタイルで単位を全部取るのはなかなか難しかったんじゃないかな。自分は専門学校出だし、大学の卒業っていうのは嬉しかったです。しかも卒業式が誕生日だったんで、卒業証書の日付は記念ですね。

三宅島・阿古地区在住

## 沖山 雄一

CAFE691 沖倉商店店主。三宅島フリークライミングクラブ代表。「三宅島大学」では「100人先生」内「ロープ手芸先生」や「マネージャートーク【三宅島のひと】沖山雄一×音楽」の講師を担当。加藤文俊研究室をはじめとする多くの「三宅島大学」関係者が本校舎そばのこのカフェでのひとときを過ごした。



僕の中でも思い入れは結構あって。御蔵島会館に「三宅島大学」ができるとき、ここ（CAFE691）が部室や学食みたいな、学生が学校じゃなくちよっと集まる場所になったらしいなって思っていました。ちよっと行き詰まったときだったり夕陽を見るために来てくれたりっていうのは、いいぞいいぞ、もっと来いなんて思ったりして。僕らが小さい頃も、島だから諦めるとか島だからダメみたいなことを言う大人が周りにいたけど、そうじゃない雰囲気

をつくりたいって僕は思っている。環境のせいにしないで、自分たちがやりたいことをコツコツ続けていく。とはいえ内地よりはどうしても隔離されている場所なので、ここを乗り切る一つのポイントって、やっぱり熱意だと思っただけです。そういう意味で「三宅島大学」は、すごく希望のある場所だったような気がするんです。やもするとちよっと諦めかけてた人たちが、ここに来ると何かできるかもしれないとか、新しいことに出会えるかもしれないとか、そうい

う場所だったのになって。年間の来店者数データを見ると、月によっては前よりも少ない。それはやっぱり「三宅島大学」の数だと思っただけで、残念なところですね。それはお金うんぬんじゃなく、人の出会いというか。いろんな人が来ていて、いろんな人と会えて。自分の娘と同じくらいの年代の人と、就職大変だねって話をしたり、それはすごく楽しかったなあ。でもまあたぶん、また近い将来、復活できたりするのかなって予感があったりもします。

## 築穴 一也

島内唯一のパン工場・築穴製菓の店主。  
『100人先生』では「風づくり先生」として講座を担当。  
突然取材に訪れた加藤文俊研究室メンバーを気さくに受け入れ、  
それをきっかけに築穴家と「三宅島大学」の関係が深まっていた。



「三宅島の大学」って聞いたときは、おもしろいなとは思ったけど、でもどんなスタイルでやるんだろって。日比野さんの「水中スケッチ」で、こういう感じなんだっていうのがなんとなく見えてきたっていうか。ふつうの大学みたいに集まっても何かを教えるんじゃないかって、自然の中とかでやるようなことなのかって。でも初めの頃はとっつきにくいというか、入っ  
ていきにくいなって感じが俺はあったな。途中から（「三宅島大学通信」ができて）いつからいつまで何をやるっていうのがカレンダーっぽくなつて、先のことわからないようになってきた。だけど（「キッズリサーチ」など）この日はプールだし子供は来ねえよなあ、ってときもあったんだよ。学校の予定も知らねえのか、って。役場のスケジュールと住民のやるやつが重なっちゃうことは今でもあるんだよな。外から来る人に対しては、俺は全然抵抗がないね。逆に、何しに来たのって興味がある方。だから最初みんなが来たときも、どうぞどうぞって。ただもうちょっと大きな目で見ると、三宅とか八丈っていうのは流人の島だったでしょ。三宅は近いから、刑の軽い人。八丈は遠いから重罪とか、一番多いのが思想犯。幕府に反対するような僧侶の人とか。八丈には玉石垣ってのがあったけど、その技術とかも流人の頭のいい人たちが持ち込んだんだよ。八丈は、そういう外のものも受け入れやすい。三宅は逆にちょっと拒絶するっていうか来てほしくないって感じは、土地の性格としてはあるのかもしれないな。

## 築穴 美喜子

夫である一也氏と共に、島内唯一のパン工場・築穴製菓を営む。  
『100人先生』では「島おじや先生」として三宅島の家庭料理を紹介。  
歴代マネージャーをはじめとする多くの「三宅島大学」関係者が  
夫妻を慕い、たびたび築穴家へ集った。



「三宅島大学」に関わるようになったのは、やっぱり（上地）里佳がいたからかな。最初に『あしたぼん』の取材で来て、そこからうちでバイトをすることになって。八月末まで住み込みをやって、九月に開校式だったんで、私もせっかくだからって配達の帰りに行きました。最初は島の人たちもみんな、何をやってるんだろ、みたいな感覚だったと思いますね。『一〇〇人先生』でいろんな島の人たちに声をかけて、島全体に知られていった感じ。最後の方で私たち（築穴夫妻）が先生になったときも「こんな感じならもっと早く関わってたらよかったかな」みたいに言ってくれた人は結構いたんです。島の人間にとっては講座についていうよりは、実際に行動するみたいなのがとっつきやすかったっていうのはあるかもしれない。ちょっと座ってそこで喋ると、そんな時間はないよっていう人は多いかも。だから結局講座っていうと、根っからの島の人ってより、東京から入って来た人たちが参加してましたもんね。坪田は特に、働いてないといけないって感覚があるんですよ。働くことが美德のような。他の地区だと、おばあちゃんたちが集まってお茶を飲んだりとか、結構してるみたい。でも坪田の人は、昼間は畑に出て夕方にそれをやる、みたいな。そういう面で言うとう仕事以外のことに時間をとって出かけるっていう感覚は、少ないかも。支庁とか、外からの人が多い地域では、そういう文化に対する感覚も違うのかもしれないですね。



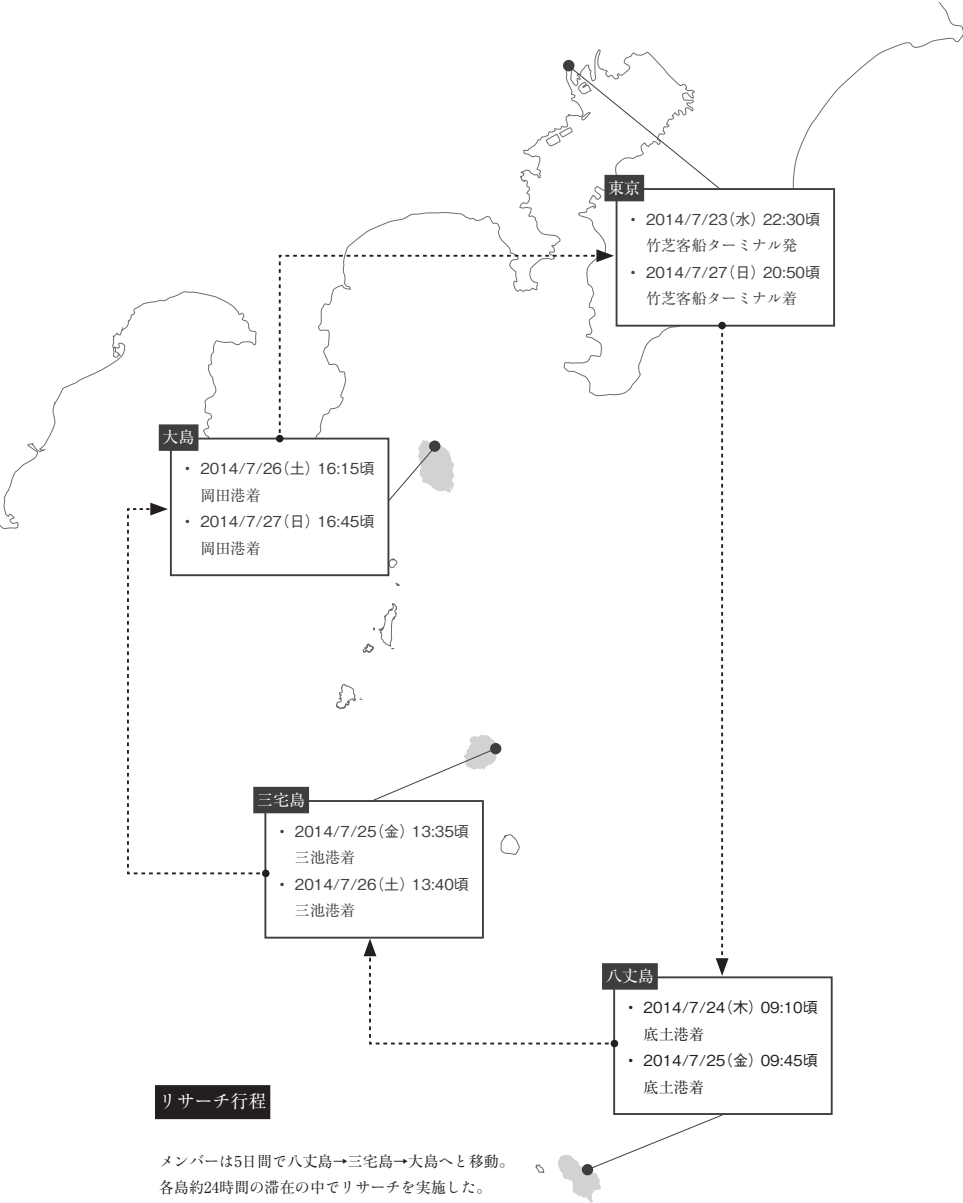


## 島をくらべる

— 伊豆三島リサーチ —

「三宅島大学」の期間中、私たちは、島のことを理解するにつれて、「島内」と「島外」との相違を際立たせて考えるようになりました。「三島リサーチ」は、三宅島を他の島々と比較し、「島どうし」の関係性を考えるために実施されたものです。慌ただしい旅程ではあったものの、八丈島、大島をとおして、あらためて三宅島を理解することができるようになりました。

「三島リサーチ」の報告は、「三宅島大学」がスタートした二〇一一年から、加藤研究室のメンバーとして関わってきた、森部綾子さんが担当しました。今回の「三宅島大学誌」をふくめると、四年近くにおよぶ関わりで、そのためか、プロジェクトへの個人的な想いも文面に表れています。



## 大きな波をこえて

森部 綾子（慶應義塾大学加藤文俊研究室・二〇一二年度卒業生）

私が初めて三宅島へ行ったのは二〇一一年六月。学生だった当時、さまざまな土地でのフィールドワークをおこなっていたが、「島」と聞いて自分にとってあまりにも未知だったために、いつも以上に強い好奇心を抱いた。今回の八丈島、三宅島、そして大島を巡る三島リサーチへの参加が決まったときも、三宅島へ初めて行ったときと同じような気持ちを抱いていた。今はもう夜の竹芝栈橋から船に乗ることもすっかり慣れた。デッキに出ると、潮風にいつもと同じ香りとベタつきがあつて「ああ、島へ行くんだな」と思った。ゆつたりと海を進む、ぜいたくな時間の流れは、ふだん味わえない特別感がある。

三島リサーチは、めまぐるしく時間が過ぎていった。少々慌ただしく、この短期間では物足りない部分もあったが、三つの島を巡って感じたのは、島として共通している部分と、全くといっていいほど異なる部分が存在している、ということだった。あたりまえのことかもしれないが、なぜこんな部分で差が出るのか、何がそうさせているのか、などといった明確な理由や

答えはその場で見つかったわけではなく、引きずりながらもややと考えていた。

### 「ずっと入りやすい島」――八丈島――

船が三宅島、御蔵島を経由し、八丈島に到着する頃にはすっかり日が高いところまで昇っていた。たくさんの乗客が下船したが、若者が多い印象を受けた。私たちは観光案内所でパンフレットを集め、レンタカーで島内をまわりながら島の様子をつかんでいった。車の数も信号も、三宅島よりはるかに多く、島を横断できる道も通っている。人口八千人を超えると、さまざまな場面で規模が違ってくる。ラジオの電波も入りやすく、自転車に乗った子供たちとすれ違ったり、インテリアショップやスパなどが道の両側に並んでいたりと、生活感があちこちに漂っている。これといった不自由も感じない。一方、廃虚と化したホテルはとても不気味で、手入れのされていないヤシの木が立っていた。港近くのみやげ物屋は明かりが消え、扉を開けてみるまで営業中だとわからなかった。平日だったせいもあるかもしれないが、かつて観光客でにぎわっていた風景をこの状態からは想像できなかった。

また、島の方との話のなかで、八丈島生まれ八丈島育ちの母親が少なくなってきたというのを聞いた。島の外から来る人びとによって、新しいものがもたらされる反面、島に古くか

ら伝わる文化や風習が薄れてきてしまっているという。どちらがよいという話ではないが、島特有のことが色濃く残りすぎている環境は、移住してきた人にとっては定住しやすく、また観光客にとっても、居心地の良さを感じられる場所ととらえることもできるように思う。

#### 「いつもと違う島」―三宅島―

翌朝、八丈島を九時に出航し、三宅島へ向かった。見慣れた景色が近づいてくると、ほっとした自分がいて、「帰ってきた」という感覚があった。島内をまわりながら、お世話になった方々に再会することができ、久しぶりに見る元気な顔に安心した。でも、島の雰囲気はどこかさみしく感じた。島を一周する道路を車で走っていて、人を見かけることがめずらしい。活気どころか、人の気配、住んでいる雰囲気がないのだ。この感覚は、今まであまり感じたことのないものだった。八丈島から移動してきたせいも、いつもと印象がだいぶ違っていたように思う。そして夏休み真っただ中だというのに、三宅島だけは子供の姿を見かけなかった。キッズリサーチで出会った子供たちは、元気にしているだろうか。

また、やたらとダンプカーなどの工事関係車両とすれ違う。これは、三宅島だからその光景なのかもしれない。いつ来ても必ず島のどこかで、公共事業関連の工事が行われている。車

道に加え、歩道も整備が行き届いていてもきれいだ、道を歩く人はめったにいない。島の方との話のなかで、「噴火によって、よくも悪くも全てがゼロになる」というのを聞いた。噴火のたびに、皆が同じラインからのスタートとなる。支援を受け、そこから賢明に再起をはかる人もいれば、またどうせゼロになってしまうのだからと、動かなくなってしまう人もいるという。「またどうせゼロになる」という考え方に今まで触れたことがなかったが、妙に腑に落ちた部分があった。環境が整い、支援があれば暮らしを取り戻していくきっかけができる。単純に思いがちだが、取り戻さなければいけないものは想像以上に大きい気がした。

#### 「人びとが集う島」―大島―

翌日、大島へは夕方四時過ぎに到着。大きな「歓迎」の文字が掲げられていて、止まっている車の数も圧倒的に多く、規模と雰囲気は港からして違う。観光地らしさ、そして活気がある。アクセスの良さは大きな魅力である。人の動きが活発になり、たくさんの人びとが交じり合うことで活性化にもつながっていくと感じた。八丈島、三宅島よりも面積、人口ともに上回るが、コンビニは他の島と同じように一軒もない。そして七時以降は全ての店が閉まる。それでも、全体的にどこか整っている印象を受けた。島っばさすらない感じた。道の整備のされ方や建物

の雰囲気、自分の日常とさほど変わらないせいかもしれない。

観光協会ですら千円分の観光復興商品券を手に入れた。各商店、飲食店など島のほぼ全ての店で使うことができる商品券で、二〇一三年十月の台風による土砂災害からの経済活性化の一環として発行されたものだそう。配布の対象は、民宿などの利用者である。こうした外の人びとを巻き込んだ支援は、あるべきかたちのひとつであり、島の中と外をつなげるきっかけにもなると思う。三宅島でも同じことができれば、と考えたが、それにはジェット船で行けるくらいの手軽なアクセスと、観光地としての意識が今以上にもっと必要かもしれない。

夜に、港の横で開催されていた盆踊りに行ってみると、子供からお年寄りまで、たくさんの人でにぎわっていた。場を仕切る青年部の熱気が、会場全体に広がり、皆がとても楽しそうだった。いきいきとしたお兄さん、お姉さんの姿は、子供たちにとってあこがれの存在として映っている気がして、そんな若者が集う場所があることをうらやましく思った。

#### 島を巡って

今まで、他の島も三宅島と似たような感じだろうと思っていたが、想像以上に異なっていた。また同時に、三宅島に対してはいつもと違う印象を抱いた。それぞれの島において、人口や面

積、都市部からの距離による違いもあると思うが、八丈島も大島も海に囲まれた小さな「まち」だった。ふだんの暮らしと変わらない感覚で過ごすことができる。今まで、「島」というと、三宅島でのイメージがとて強く、自分のふだんの生活と少し遠い感覚があって、「まち」という意識がなかったが、今回自分の感覚を改めるきっかけとなった。大島に関しては、観光客への意識が高く、頻繁な船の出入りのおかげで人の行き来が活発で、みやげ物屋にも人が大勢いた。また、まちと人びと、人と人との距離感が近すぎず都会的で、手段や頼れるものが豊富にあり、依存を分散できる。つまり、島内の人びとの関係性に頼りすぎずに生活していけるのだ。対して、八丈島と三宅島は自分たちの暮らしが中心で、観光地としての意識が際立って表に出ることはないように感じた。生活のリズムも一日一便しかない船の時間に合わせて刻まれている。また、八丈島と三宅島を比較し、違いとして感じたのは、八丈島には外からのものを受け入れる土壌がある点だ。それに比べて、三宅島はごく閉鎖的な環境、雰囲気をつくり出して、圧倒的にさみしい感じがしたのだ。その圧倒的なさみしさはどこからくるのか。

八丈島、大島とは違って、三宅島では自ら動かず、島にただいるだけでは、人びとの暮らしに近づけず、人の「息づかい」を感じられなかったことがその理由のひとつと考えられる。そしてそれは、まだ三宅島が再生途中であるということに関係しているのではないかと思う。全島避難で島から誰ひとりいなくなる。長い間人びとが暮らし続け、築き上げ、積み重ねてきた

ものが完全に止まってしまった経験が三宅島にはある。人が暮らしていくということは、見た目だけではわからない雰囲気や空気のようなものも、長い年月をかけて確実に刻み込まれている。帰島して十年が経過したが、「まち」として再生するには、もう少し時間がかかるような気がした。

また、人やもの、全てにおいてごく限られたものに頼っている環境であることも関係していると思う。よそ者、あるいは少数派に属する人びとは、自分から頼りの綱を太くしていかない居場所が狭くなっていってしまう。噴火をともに乗り越えてきた昔からの付き合いや、つながりが濃いことは三宅島の特性のひとつとしてあげられる。そのつながりのなかに入ると密接な関係性と居心地の良さを得ることができ、気づけば全てを完結させている。それゆえ、外から入ってくるものに対する警戒心が自然と強まり、よそ者にとっては「さみしさ」を感じることにつながっていく気がした。今回、他の島を訪れ、こうして三宅島と改めて向き合えたからこそ、ぼんやりとした感覚でとらえていた部分を、言葉にして整理することができた。

#### さいごに

初めて三宅島へ行ったとき、私は一日遅れで合流することになっていたため、いきなり一人

で船に乗り、期待と不安が入り交じっていたのをよく覚えている。到着後は、考えるひまもないほど、得る情報が多すぎて頭の中が常に熱くなっていったし、帰ってきてからも、情報と気持ちの整理をするのに時間がかかった。今回も同じような感覚があつて、後から使うエネルギーもかなり必要だった。私自身の今までのフィールドワークをふり返ってみると、三宅島ほど何度も訪れた土地はない。島で過ごす時間が増えていくにつれて、自分自身の三宅島への興味と思い入れはだんだん強くなっていった。自分たちが何者か、「三宅島大学」は何をしているのか、わかってもらえるところまでくるとは時間もそれなりにかかったし、乗り越える壁も多かった。「三宅島大学」をつうじて、よそ者かつ学生だったから起こせた行動もたくさんあったと思う。もちろん、よそ者として受け入れられずに苦しい部分ももちろんあったけれど、学生という身分に甘えて、自ら近づいてみることでその苦しさを越えられる瞬間もあった。その場で考えて動き、地味でいいから足跡を残して、少しずつわかり合いたいと思いつつ『あしたばん』やポスターを一枚ずつ手渡してきたのだ。そうして居場所をつくりながら過ごす三宅島での時間を、いつも心から楽しんでいった。

この先、私と三宅島との関係性はどうなっていくかわからない。自分のなかでは、よそ者である意識がだいたい薄れてきているが、完全によそ者でなくなることはできないと思っっている。近いうちにまた船に乗るつもりでいる。三宅島には、会いに行きたい人びとがいるのだ。





三島リサーチで訪れた三宅島の風景





#### 登壇者

### 加藤 文俊

社会学者。慶應義塾大学環境情報学部教授。  
地域リサーチの手法として、まちに大学システムをインストールする  
プロジェクトを2010年に墨東エリアで実践(墨東大学)。  
「三宅島大学」では企画全体の監修を行った。



#### 登壇者

### 五十嵐 靖晃

アーティスト。  
土地に住み、その日常に入り込み、そこで出会う人達と共に、  
普段の生活の中に新たな視点と人の繋がりをつくるプロジェクトを展開。  
「三宅島大学」では『そらあみ』(19頁)の制作や展示を行った。



#### 登壇者

### 大南 信也

特定非営利活動法人グリーンバレー理事長。  
徳島県名西郡神山町を舞台に、アーティスト・イン・レジデンスや  
ワーク・インレジデンスなどの人材誘致をはじめとする事業を展開。  
多様な人が集う「せいかいのかみやま」づくりを進める。



#### 進行

### 森 司

東京アートポイント計画 ディレクター。  
東京アートポイント計画の立ち上げから関わり、ディレクターとして  
アートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムなどを手がける。  
「三宅島大学」のしかけ人であり、さまざまな人材をコーディネートした。



## 方法をくらべる

—「三宅島大学誌」公開研究会—

二〇一四年十月四日、東京文化発信プロジ  
ェクトROOM302で、「三宅島大学誌」  
の公開研究会を行いました。これは、聴講者  
からのフィードバックによって大学誌編纂に  
向けた示唆を得ると共に、「三宅島大学」以  
外の地域コミュニティにかかわる活動事例を  
知ることで「三宅島大学」の活動を新たな視  
点から検証することを目的としていました。  
神山町という場所に根ざし、アーティスト・  
イン・レジデンスなどの試みにより新たな人  
を受け入れる立場でNPOの活動を実践して  
きた大南さん。それに対し、三宅島という場  
所へ外から入り込む立場であった「三宅島大  
学」の面々。特定の地域で活動を起こしてい  
くことについて、それぞれの立ち位置からど  
のようなアプローチをしてきたのでしょうか。



## 「三宅島大学誌」公開研究会 クロストーク

(登壇者・加藤 文俊／五十嵐 靖晃／大南 信也 進行・森 司)

研究会は、各登壇者による事例紹介からはじまった。加藤氏は「三宅島大学誌」のねらいや「三宅島大学」の基本構想をふり返り、五十嵐氏は三宅島でのリサーチをきっかけに制作した作品『そらあみ』を中心に、いくつかの地域におけるアートプロジェクトを紹介。大南氏は「NPO法人グリーンバレー」の活動のミッションや、徳島県神山町での具体的な実践について説明した。

ここでは、それぞれの事例紹介に続いて行われたクロストークの模様を一部掲載する。

「結果として」

生み出されるもの

感想を持たれましたか？  
加藤 大事なことは二つあって、まず一つ目。僕たちがメディアによって神山の存在そのものに気が付いたのは、ここ数年だ  
感想を持たれましたか？  
と思うんですね。だけど今日話を聞いていると、実は十数年前から種は蒔かれていて、しかけが動き始めていた。だから、簡単に真似できない。時

は「結果として」っていう表現をされてたんですね。何かを動かしていくといろんなことが見えてきて、モノが動き、ヒトが動く。常に考えることを止めない、常にアクションを忘れずにやっている、「結果として」出た、っていうところがすごく印象的でした。一つのフェーズをやり続けた先に、今度は違うモデル、次のフェーズがあるっていうのはすごくおもしろい。それを観察するのには、二五年くらいかかるんだなあって。  
エポックメイキングなタ  
イミングがあると思うんですよね。プロジェクトが始まる前だとか、節目  
節目でのそういうった実感  
はあるんでしょうか。  
大南 僕らのスタートは、自分の小学校に残っておった青い目の人形やっ  
つたんです。(当時の)  
六三年前、一九二七年に  
アメリカから贈られたその  
人形がパスポートを持って  
とって、出身地が書いてあ  
った。それで、誰が送って  
くれたんか探してやるう  
つてことで、  
むこうの市長さん宛に手  
紙を書いたんです。結果  
的に贈り主は亡くなられ  
とったんやけど、せつ  
くやからいちど人形を里  
帰りさせようってこと  
で、三十名の訪問団を  
間で結成して。その内  
の五名が、後のグリーン  
バレーの中心になるよう  
な人間。そこの成功体験  
がベースになつてるから、  
次に新しいプロジェクト  
をやるときハードルが  
低くなった。あのとき  
たいにやれたらできるよ  
なっていう感覚的なもん  
が共有できとつたのが  
大きかったと思います。そ  
して何よりも一番大きな  
1) がつくれたこと。ほ  
んでそのときに、西村佳  
哲さんってデザイナーに  
出会ったこと。彼は若者  
が地方で働くことに対  
して非常に関心を持って  
るんです。神山の人たち  
と話をしとつたら、移住  
者が欲しいんやと。でも  
事が無いから移住者を  
迎え入れられないと。だ  
たら、場所を問わずに働  
けるような仕事を持った  
人間に入ってもらえば  
いいんじゃない。彼の  
その「ワーク・イン・レ  
ジデンス」という言葉  
自体が、結果的に神山を  
変えたと思っ  
ています。

森 その二五年の中でも  
紙を書いたんです。結果  
転換期は「イン神山」(註







アーティストなのか  
何者なのか

森 数十年前に贈られた人形の話っていうのは、ある種アートプロジェクトじゃないですか。アーティストである五十嵐さんとっては、アートプロジェクトやアーティストの可能性についてどう考えているんでしょう。

り。すごく単純に言う  
と、視点をずらす。その  
きっかけをつくるって  
うのが、一つ自分たちの  
仕事ではあると思ってい  
ます。そこを伝えていく  
段階になったときに、作  
品を置いて成立するもの  
とは違う関わりの中で、  
出し手と受け手の間に時  
間や場をどう設定できる  
か。そういう部分が変わ  
っていますし、そこ自体  
が可能性でもある。そこ  
をもっと評価軸にも乗せ  
ていかなきゃなとも思  
いますね。そういうフレ  
ムだから、社会学や他の  
分野との棲み分けがどう

なるかというはあるん  
ですけど。僕の場合はビ  
ジュアル化する、可視化  
できるものに一つ重きを  
置いています。

加藤 自分を何者として  
名乗るかという話は重要  
ですよ。五十嵐さんは  
アイデンティティとして  
アーティストですと名乗  
り、なぜ自分がアーティ  
ストかということも言  
葉にできる。だけど僕か  
らすると、五十嵐さんの  
経験が違うボキャブラリ  
で語れば、社会学の研  
究者なり実践者になりう  
るんじゃないかと思うん  
です。同時にそれとは全

く逆のことも起きてい  
て、僕たちがやっている  
活動をアートだって言う  
人もいるんですよ。僕た  
ちはそう思ってたって  
いないだけけれども。考  
えてみると：どっちでも  
いい(笑)。もつと突き  
詰めていくと、自分が何  
者であるかを名乗ること  
が、僕の日常生活の中で  
はあまり必要ない。たと  
えば誰かと出会って、名  
刺交換のような形式が必  
要なときには、自分が社  
会学者であるということ  
を名乗らなくてはいけな  
い。五十嵐さんもある局  
面ではアーティストを名

乗らなくてはいけない  
だけど、それをしなくて  
も実際には握手ひとつで  
一緒に網が編める。それ  
でハッピーなわけなんで  
すよね。僕らにしてもあ  
るやり方で人とコンタク  
トを取れば、僕が何者で  
あるかということを手  
も気にせずにコミュニケ  
ーションが進行する。  
それがリアルなんですよ  
ね。むしろ説明を求めて  
いるのは僕以外の多くの  
人で、僕にとってはもし  
かしたら説明は全然要ら  
ないのかもしれない。

イストとしてアートプロ  
ジェクトをしているとも  
言えるように僕は思うん  
ですけど。ご自身には全  
くそのような意識はない  
のでしょうか。

大南 それはあまりない  
ですね。僕はあんまりア  
ートに興味ないんですよ  
(笑)。何に興味があるか  
ゆうたら、人がどうい  
う風に動いて物事がどう  
みたいなマネジメントの  
方で。で、最初はこうや  
ったら人がだんだん集ま  
り始めるだろうなって想  
定のもとで動いていて、  
現実人が集まってきた

らもうおもしろくなくな  
る。結構飽きっぽいんで  
すね、ついつい関心が移  
っていつて。でもこれも  
「結果として」ですけど、  
だからこそ新しいことに  
踏み込むことができるわ  
けなんですよね。

オープン・フラット・  
フレキシブル

森 先生や五十嵐君は新  
しい現場へ入っていく立  
場ですけど、神山の場合  
は新しい人を受け入れる  
側ですよ。そうやって  
受け入れることに関し  
て、何か基準というのは

ありますか。

大南 単純に言えば、神  
山に入って来て何か変化  
を起こせるような人とい  
う、それが一番重要な要  
素じゃないかなと思いま  
す。常に心がけてきたん  
は「オープン・フラット・  
フレキシブル」。オープ  
ンというのは、内と外と  
の境界線を作らない。  
これは人形からスタート  
してずっと国際交流をし  
てきとったんで、習慣化  
しとるというのがありま  
す。毎年夏になったら、  
外国の若い子たちが五十  
人くらい、四泊五日くら  
いで町にやってくるんで

すね。そういう動きを十年もぐるぐるまわしとったら、住民も慣れてくる。だから東京から若い子が来ても、もつと極端なのを経験しとるから、あんまり内と外を分けない。フラットは、入ってくる人間と僕らの間に上下関係をつくらんということ。そのせいで意見を言いにくくなって、うまくいっていないのに辛抱されたら、こちらも勘違いしてしまう。それで次の展開を重ねてしまつたら、こちらの努力も無駄になる。だから正直になつてほしいというこ

とで、フラットな関係をつくるんです。きちつと問題を告白してもらえれば、じゃあこういうやり方はうまくいかんのだつてことで次の可能性を探るときに除外して考えられるから、それはマイナスにはならんです。加藤 今挙げていただいた「オーブン・フラット・フレキシブル」、これはいろいろな地域での活動を語るときに大事なキーワードだなと思つて。その観点で「三宅島大学」のプロジェクトを評価すると、オーブンというところでは神山に比べると

間口は狭かったかもしれない。フラットかどうかというのは、東京都の事業であるっていう構造的な部分と三宅島の人間関係のつくられ方っていうところの両方から見る必要がある。フレキシブルっていうのはさっきの「結果として」というキーワードと言ひ換えることができるかもしれないですね。状況を見ながらよいと思う方、おいしそうな方を積極的に選んでいく。それでもなおかつグループとして、ちゃんと協調性を保ちながら動けるといふ形。乱暴な言い

方をすれば、三宅島の場合は逆に振れていたのかもしれない。これは別に環境のせいにするという意味ではなくて、だからこそ僕たちがある場所に入つて行くときは、そこがどういう場所なのかがある程度見通しながら進め方を考える必要があるというか。心のありようも含めて、振る舞い方も変えなきゃいけない。神山とは全然違うモデルというか、違う実践のように見えるのだけど、考えるためのヒントはありそうだなと。

森 フレキシブルという

意味では、我々としても方法的にはかなり臨機応変なつもりでいたんですよね。何をしてもよい、そのために「三宅島大学」って枠組みを用意したんです。でも、その広さが逆にわかりづらいとも言われてしまつて。あとは指標のところ、島の方が求めるのはやっぱり観光客が増えるとかの経済効果がでてしまう。それが微妙に我々が求めているゴールのイメージと違つてきたというのも正直あるのですけれども。神山の場合の成功イメージについていうものは、どう

いうところから導かれていくのでしょうか。大南 別に成功のイメージはあんまり持つてません。グリーンパレーでやってきたことは町民から求められていたことでも何でもなくて、勝手にやつとつたことなんです。結局グリーンパレーっていうのは何かゆうたら、例えばゲートボールをやりよるおばあちゃんグループとか、カラオケをやりよるグループとか、そういうのとおんなじ位置づけですよ。ただ僕はゲートボールとかカラオケよりも地域

をつくることがおもしろなつて、そっちの方をやってきた。それが結果、何か成果を生んでしまうたつてだけで。自分らの持つておる力とか活かしている資産をとにかく最適に動かしていったときに何が起ころんか、それを楽しんでみよるだけ。とにかく現状を最適化していけばたぶんいい方向に行くだろうっていう予見だけで、この変化を楽しんでいきよるといふところかなと。

誰かのつばやきに耳をかたむける 森 いまあえて現状に回答するといふ風におつしやいましたけど、神山のそもそもの最初の出発としては、未来からの逆算で設計をしたつていうところもありますよね。大南 それはあります。神山はサテライトオフィスで企業誘致をやつてますねつていう話もよくされるんやけど、違うんです。これは人材誘致なんです。例えば六本木ヒルズやミッドタウンにいるようなITベンチャーの



人たちは、本来なら神山  
みたいな限界集落を見る  
ことになるはずがないん  
ですよ。ところが偶然サ  
テライトオフィスという  
橋がかかって、そういう  
人たちが入ってくるよう  
になった。そういう人た  
ちの目で限界集落を見る  
と、ずっとそこに慣れ親  
しんできた人間とは全く  
違うものが映るんですよ  
ね。その映ったものに対  
して、その人たちがいつ  
か何かをつぶやく。その  
つぶやきがもししたら、  
現状にブレイクスルーを  
起こすかもしれない。そ  
の1つが有機農業(註2)

ってことやったと思いま  
す。ある漠然としたつぶ  
やきを自分らで勝手に有  
機農業というキーワード  
にしてもうて、じゃあ  
これをもう少し戦略的に  
進めていったら、また違  
うところに連れて行って  
くれるんじゃないかなっ  
ていう。だから常に、そ  
ういうまっさらな目を持  
った人たちの言うことは、  
たとえ幼稚園の子だった  
としても、僕らはずっと  
耳をかたむけます。誰が  
何をつぶやいてくれるか  
はわからないので、だから  
常にこう、聞いてるって  
いう状況ですね。

五十嵐　そこでパラシュ  
ート部隊として現場に入  
って、胸を張って、こん  
なモノの見方がおもしろ  
いよって。そういう役割  
が、現代のアーティスト  
の定義なのかもしれない  
ですね。最初に入ってきた  
て、こういう見方がある  
まう。それは自分と照ら  
し合わせて感じる部分は  
ありますね。

森　よく「よそ者・若者・  
ばか者」と言いますが、  
その言葉を本当に体現さ  
れているなあと思います  
ね。同時に、そうやって  
耳にしたつぶやきに対し

てワーディングをなさっ  
ているじゃないですか。  
加藤　神山のケースもそ  
うだし五十嵐さんもそ  
うですが、実践だけではな  
くてやっぱりそういう言  
葉を出しているところが  
強いと思うんですね。  
それは、これから先に起  
きることで、まだ生まれ  
ていないことかもしれない  
んだけど、言ってしまう  
うとそれがリアリティを  
もつというか、言葉が流  
通し始める。それはぜひ  
やるべきことだと思いま  
すね。あともうひとつ言  
葉ということだと、誰が  
何をつぶやくかわからな

いという話はすごく大事  
で。ささやかながらも、  
「三宅島大学」に関する  
いろいろなつぶやきを僕  
たちは拾ってきたつもり  
なんです。それが従来  
の評価のものさしに乗ら  
ないだけであって、僕た  
ちのものさしとか僕たち  
の感度で耳をすましたと  
きに聞こえたつぶやきは  
たくさんあるし、生まれ  
森　三年間で気づけたも  
のを可視化して、フィー  
ルドを貸していただいた

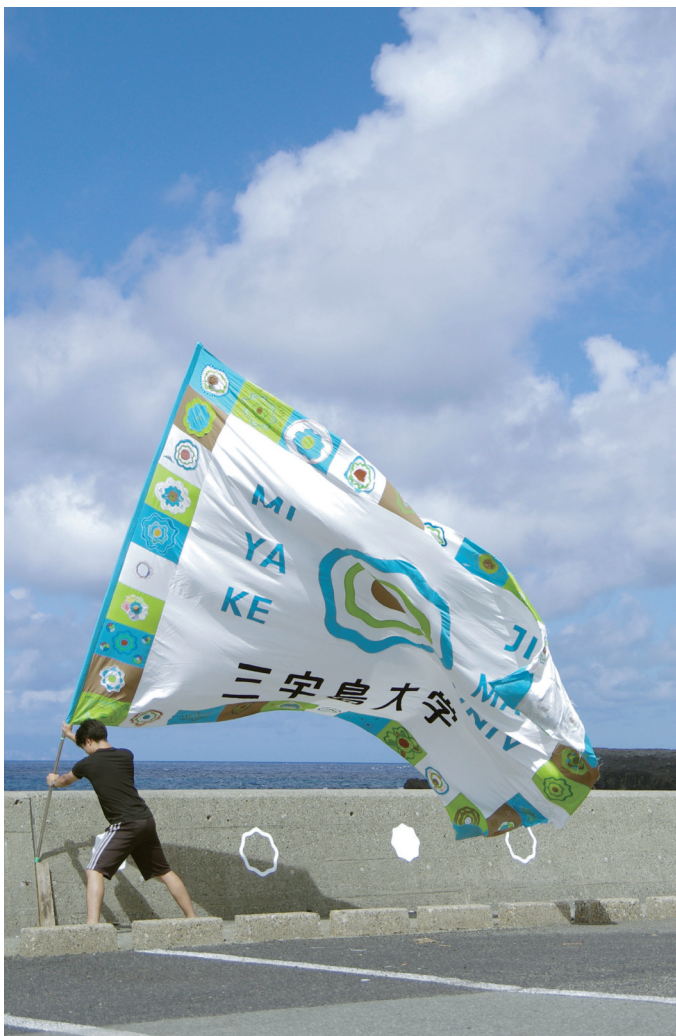
モノをどう表に出すか、  
どう見せるかというのが、  
僕たちが今後やっていく  
ことなのかなと思います。  
違う場所への関わり方の  
きっかけを、それがつく  
るかもしれないですね。

## 註

註1 「神山で暮らす人、暮らしたい人。神山に来る人、来たい人。神山で夢を実現したい人、可能性に挑戦したい人のためのサイト」として開設。神山についてのさまざまな情報を発信している。

<http://www.in-kamiyama.jp/>

註2 グリーンバレーが考える今後の展望の一つ。ワーク・イン・レジデンスにより開店したビストロやピザ店では有機農産物が提供されていることに注目し、有機農業者を重点的に神山に集めることを検討。有機農産物を扱う飲食店を増やし、オーガニックフードのまちとなることを目指す。



---

---

## 「三宅島大学」をふり返る

---

---

「三宅島大学」で活動していると、「よくわからない」と言われることが多くありました。二〇一一年九月、華やかな式典とともに開校したので、「大学」の存在自体は、早い時期から認知されていたようです。実際に、開校式では多くの人びとが「学生証」を手にしました。でも、その具体的な活動内容については、三年目の閉校式の頃まで「よくわからない」ままだったのかもしれない。

それは、なぜか。本当に「よくわからない」活動だったのか。「三宅島大学」が、何を指していたのか。それを考えることは、「アートプロジェクト」とは何かを考えることです。本項では、「三宅島大学」の成り立ちをふり返りながら、足かけ四年におよぶ活動に、ひとまずピリオドを打ちます。

## 「三宅島大学」とは何だったのか

加藤文俊（慶應義塾大学環境情報学部教授）

### 島の誘惑

「島に行きませんか？」というひと言で、プロジェクトが動きはじめた。東京文化発信プロジェクト（以下文プロ）の森司さんから電話があったとき、どの島なのかを確かめることもなく「はい」と返事をしていった。他の参加者も、同じように「島に行きませんか？」というひと言が、かかわるきっかけになったようだ。島は、それほどに魅惑的である。その魅惑は、おそらくは、行ったことがない「未知」の場所であるということ、そして、多くの人が想い浮かべるであろう「青い空、青い海」というイメージによるものだ。だが同時に、「未知」の島は、畏れるべき場所でもある。日本全国を見渡せば、人口規模も面積も同じくらい村は、他にいくつもあるはずだが、周りを大海原に囲まれた島への行路は、期待ばかりでなく、不安もあった。「三宅島大学」の成り立ちや具体的な実践について紹介は別の項に譲るが、プロジェクトと

しては、わずか三年間（二〇一〇―二〇一三年度）で終了した。すべてが順調だったわけではないし、思うように行かないこともたくさんあった。いまだに判然としないことも少なくない。だが、幸いにも「三宅島大学」が閉校してから、さらにもう一年、ふり返るための時間をいただいた。こうした事業は、年度末になって（やや慌ただしく）「報告書」をまとめ、それで「終わり」になることが多い。ひととおりの成果をまとめると、その反動で開放された気持ちになって、ゆっくりと活動を反芻し、意味づけを行うことはあまりない。あたらしいプロジェクトがはじまると、不思議なほど簡単に熱が冷めてしまう。地域コミュニティに根づくことを目指しているプロジェクトであっても、年度の節目や資金面での方針変更によって、いとも簡単に土壌が一新される。

この一年は、島に出かける機会がなくなり、ある種の「欠乏感」とともに過ごした。「三宅島大学」での活動を経て、じぶんの日常のリズムに、島にいる時間が少しずつ刻まれるようになっていたことを再確認した。そのことで、少し距離をおいて「三宅島大学」プロジェクトそのものについて考えることができるようになった。また、伊豆諸島（あるいはもう少し限定して、伊豆七島）には、いくつもの島があるにもかかわらず、「三宅島大学」の開校期間中に、他の島を訪れることはなかった。森さんの勧めもあって、二〇一四年七月には、八丈島や大島を巡る旅をした。大急ぎではあったものの、他の島をじぶんの目で見たことによって、三宅島

を相対化して語るためのヒントを得たと思う。

ふだんよりも時間をかけてふり返ること。そして、他の島々をふくめたもう少し広い範囲で位置づけてみることに。「三宅島大学誌」プロジェクトは、三年間の実践をもう一度とらえなおし、「三宅島大学」とは何だったのか、さらに広い文脈でアートプロジェクトという活動そのものについて考える試みである。

#### アートプロジェクトという方法

「三宅島大学」は、三宅村、三宅島大学プロジェクト実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）の共催のもと、「東京アートポイント計画」（東京文化発信プロジェクト室における拠点形成事業）のアートプロジェクトとして展開した。

近年、アートプロジェクトによる地域活性化の試みが、注目を集めるようになった。もちろん、試みとしてはしばらく前からあったが、とくにここ数年は際立っているようだ。まさに「地域創生」という文脈で語られることも少なくないはずだ。たしかに「アートプロジェクトによる地域活性化」という響きも魅力的だが、このことばは、その意味するところをよく考えて慎重につかいたい。「アートプロジェクト」も「地域活性化」も、日常的につかわれることばに

なりつつある。そして、その日常性こそが、情報共有やコミュニケーションを難しくしている。さまざまな形で「アートプロジェクト」や「地域活性化」が理解され、語られているということに着目するためには、コミュニケーション論からのアプローチが有用である。「アートプロジェクト」や「地域活性化」の評価に関わる問題は、基本的なコミュニケーション観に照らして考えることができるからである。

コミュニケーション論においては、送り手から受け手へのメッセージの「伝達」としてコミュニケーションを理解しようと試みることが少なくない。その場合、私たちのコミュニケーションは、メッセージが「伝達されたかどうか」という「成果（結果）」で評価されることになる。いっぽう、コミュニケーションという絶え間ない過程に着目するならば、「意味づけ」という側面が際立つ。まさに、そのとき・その場の状況を熟知しようという試みこそが、コミュニケーションの本質だという考え方である。

「アートプロジェクト」や「地域活性化」は、その過程が大切だと言いながらも、（最終的には）わかりやすい「成果（結果）」で評価されることが多い。あえて単純化するならば、「アートプロジェクト」という方法が、「地域活性化」という「成果（結果）」をもたらすかという議論である。本論は、「意味づけ」の過程としてコミュニケーションを理解する立場から整理したいと考えている。人と出会い、かわりながらつくられる場所での体験は、つねに個別的で、



私たちの身体や現場に消えゆく性質のものである。その一つひとつのエピソードの具体性をふり返りながら、「三宅島大学」というプロジェクトの輪郭を描いてみよう。

「三宅島大学誌」プロジェクトでは、着想・準備から開校、実践を経て閉校にいたるまでの「過程」を記述することを重視している。その一環で、三年間の記録を集約する「デジタルアーカイブ」をつくる作業も進行中である。まずは、写真や動画、文書などもふくめ、プロジェクトがすすむ過程で生み出されたさまざまな記録を収集する。なかには、デジタル技術のおかげで不可避免的に残されていく記録もある。こうした多様なデータにキーワードを付与し（あるいは、タグ付けし）、検索や分類、並べ替えなどが容易になっている。いうまでもなく、こうした記録を束ねた「アーカイブ（＝所蔵庫）」としての役割は無視できない。だが、データの格納を終えても、この「所蔵庫」の扉を開けておくつもりで「アーカイブ」そのものを理解している。日常的にこの記録の束にアクセスし、「三宅島大学」についてのコミュニケーションが、ささやかながらも継続していくための方法や、私たちの態度について考えることが重要だと理解しているからである。

「ニーズ主導」から、  
「可能性志向」へ

「アートプロジェクト」や「地域活性化」というテーマに取り組む際、少なくとも二つのアプローチを考えることができる。まず、私たちに比較的なじみ深いのは、地域における諸問題を同定し、それに対する解決方法を探るというアプローチだ。たとえば図1のように、地域をめぐる問題状況のマッピングが行われ、対処方法や優先順位の検討、さらにはコストの試算・配分等についての議論がすすめられる。図は、例示のために簡略化してあるが、問題状況は、その規模や緊急性、抽象度に応じて分類される。「アートプロジェクト」は、たとえば少子高齢化、生涯学習、

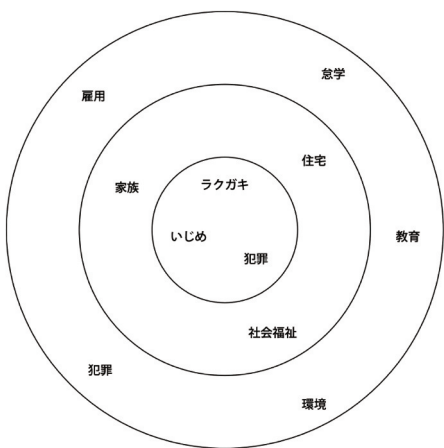


図1: ニーズにもとづいた問題状況のマッピング Kretzmannほか(1993)を元に作成 [註1]

シャッター商店街、コミュニティの喪失など、私たちが日頃マスメディア等で目にする「地域活性化」にかかわる問題や課題とともに語られることが多くなつた。このアプローチは、「問題（課題）ありき」でスタートするので、「アートプロジェクト」は、これらの「問題（課題）」の理解や、解決のための方法として位置づけられることになる。

Kretzmannらは、こうして「ニーズ主導 (needs-driven)」とも呼ぶべきアプローチ自体が、問題状況に向き合う当事者たちを、必要以上に「クライアント化」する可能性がある」と指摘する。ひとたび地域コミュニティにおける「問題（課題）」が提示され共有されると、当該の「問題（課題）」にかかわるアクターやその役割関係が固定的になりがちだからである。また、地域に固有の問題でありながら、不特定多数の人びとを「受け手」に想定した記述、報道がなされると、問題状況そのものが、あたかも「他人事」であるかのように対象化されることになる。

近年、アメリカ、オーストラリアを中心に、Asset-Based Community Developmentアプローチ（以下ABCDAプローチ）の実践が拡がりつつある。同アプローチは、地域におけるニーズを発掘し、それに対して「問題解決」を試みるという「ニーズ主導」の発想ではなく、まずは地域のもつ「資産」を熟知し、その潜在的な可能性を模索するものである。つまり、「可能性志向 (capacity-focused)」という立場から、地域に偏在する多様な「資産」の理解を試みることになる。ABCDAプローチでは、ことなる発想でマッピングを行う。図2のように、地域コミュニ

ニティが保有する「資産」を、「個人の属性・能力」「地域における集まり」「地域の組織・施設」から構成されるものとして位置づけ、地域の「強み」（潜在的な可能性）を可視化しようと試みるのである。

たとえば、地域の組織・施設のひとつであるコミュニティ・カレッジは、次のような側面から「資産」としての価値をもつと評価することができる（註3）。

- 教員・スタッフ 高度な専門知識・技能をもつ人財の集まりとして、地域コミュニティへの貢献が期待できる。新規科目の提案や学生たちのボランティアな参画など、双方向の交流へとつながる可能性がある。

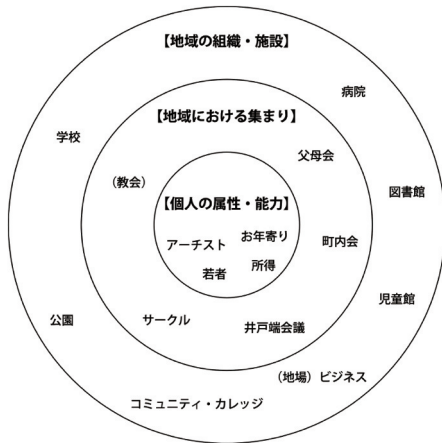


図2: ABCDアプローチによる地域資産のマッピング Kretzmannほか(1993)を元に作成[註2]

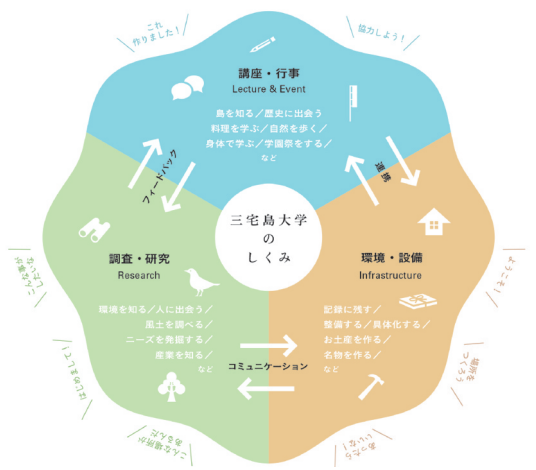
- 空間・施設 さまざまな集まりのための物理的な空間を供与できる。たとえば稼働率の低い時間帯は「外部」の活動主体に開放する。屋内スペースのみならず、屋外の駐車場やスポーツ施設、キャンパス内のランドスケープ（公園としての機能を果たす）も地域資産としての価値を発揮しうるだろう。
- 機材・備品 施設面のみならず、コミュニティ・カレッジが備えるさまざまな学習のための環境も役立つ。コンピュータをはじめ、AV機器、工作機械、書籍などは地域コミュニティに開放され有用に活用されうる資産価値を備えている。
- ノウハウ 当然のことながら、コミュニティ・カレッジ内で提供されている講座や実習は、地域に直接的に役立ちうる知識・知恵の集積として理解することができるといえる。
- 経済的貢献 また、直接的には雇用機会の創出という形で地域コミュニティに貢献しうる。

ABCDアプローチでは、このようにさまざまな観点から「資産」をマッピングした上で、地域コミュニティにおける潜在的なパートナーを考え、そのパートナーとの紐帯を強化するための方法・方策を検討する。そして、最終的には個別具体的なアクションへと結びつける。「三宅島大学」はこのABCDアプローチの考え方を参考にしながら構想した。開校時（二〇一一年九月）には、「調査・研究」「講座・行事」「環境・設備」という、相互に関連する三つの活

動領域とともに実装された。

- 調査・研究 三宅島の地域資源を再発見・再評価し、その潜在的な可能性を模索し、発信する。
- 講座・行事 地域コミュニティ内外の多様な人びとの出会いや交流、コミュニケーションを誘発する。
- 環境・設備 交流拠点の整備、情報発信ツールの開発、人材の育成などをおこなう。

私たちは、それぞれの領域における活動とおして、三宅島の潜在的な可能性（キャンシティ）を理解しようと試みた。「三宅島大学」という「アートプロジェクト」は、そもそも探索的・構成的な活動としてデザインさ



出典：三宅島大学オフィシャルサイト <http://miyakejima-university.jp/structure>

れていた。その意味で、「三宅島大学」プロジェクトは、(あらかじめ可視化されていた)「問題(課題)」を解くことよりも、(まだ見たことのない)「潜在的な可能性」を発見することを志向していたと言えるだろう。

### 三宅島の「資産」をマッピングする

あらたな「大学」を(実験的に)つくろうというとき、そもそも「大学とは何か」という問いかけが必要になる。「大学」について考えるとき、ギルバート・ライルの『心の概念』の冒頭の一節を思い出す。少し長くなるが、引用しよう。

オックスフォード大学やケンブリッジ大学を初めて訪れる外国人は、まず多くのカレッジ、図書館、運動場、博物館、各学部、事務局などに案内されるであろう。そこでその外国人は次のように尋ねる。「しかし、大学はいつどこにあるのですか。私はカレッジのメンバーがどこに住み、事務職員がどこで仕事をし、科学者がどこで実験をしているかなどについては見せていただきました。しかし、あなたの大学のメンバーが居住し、仕事をしている大学そのものはまだ見せていただいております。」この訪問者に対しては、この場合、大学とは彼が見てきたカレッジや実験室や部局など

と同類の別個の建物であるのではない、ということを示明しなければならない。まさに彼がすでに見てきたものすべてを組織する仕方が大学にほかならない。すなわち、それらのものを見て、さらにそれら相互の間の有機的結合が理解されたときに初めて彼は大学を見たということになるのである。彼の誤りは、クライスト・チャーチ、ボードリアン図書館、アシユモレー博物館、そして大学というように並列的に語るができると考えた点にある。

この一節は、「カテゴリー錯誤」という問題を説明するために使われている事例だが、こうした錯誤が起きやすいということ自体が、「大学」の複雑さであり、「面白さ」なのだ。たしかに、私たちは、「大学」をめぐる日頃のやりとりのなかで、「カテゴリー錯誤」に陥っているのかもしれない。だからこそ、「大学」をつくるという課題を目の前にすると、何を考えればいいのか、さまざまな「資産」への接点をどのように獲得すればいいのか、あれこれと頭を悩ませるのである。

ライルの一節にあるように、「大学」は、さまざまな要素を「組織する仕方」という点に、あらためて光を当ててみよう。つまり「大学」は、さまざまな要素の〈関係性の集合〉ともいえるべきものだ。そう考えると、あらためて、前述のABCDAプローチの有用性にも気づくだろう。「個人の属性・能力」「地域における集まり」「地域の施設・組織」など、じつに多くの「モ



ノ・コト)が、「大学」を理解するための素材になりうるのだ。重要なのは、私たちが「三宅島大学」について語る際に、どのような関係性に着目するかという点だ。

「三宅島大学」プロジェクトは、さまざまな「講座・行事」を提供しながら三宅島の潜在的な「資産」を発掘し、可視化する活動であった。もちろん、三宅島の雄々しい自然は、そのままでも、すでに「資産」としての価値がある。だが、多様な「資産」のあたらしい組み合わせやつながりを考えることで、三宅島の個性をさらに際立たせることができるはずだ。

表1は、前述のA B C Dアプローチの流儀にしたがって、「個人の属性・能力」「地域における集まり」「地域の施設・組織」という

個人の属性・能力	地域における集まり	地域の組織・施設
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども</li> <li>・ 主婦</li> <li>・ おかみさん</li> <li>・ 先生</li> <li>・ 漁師</li> <li>・ 高校生</li> <li>・ お年寄り</li> <li>・ 店主 (商店・パン屋・カフェなど)</li> <li>・ 村役場の人</li> <li>・ プロジェクト事務局</li> <li>・ マネージャー</li> <li>・ 文プロ</li> <li>・ アーティスト</li> <li>・ 大学教員・研究者</li> <li>・ 学生</li> <li>・ 観光客</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 富賀神社大祭 (隔年)</li> <li>・ 船祝い</li> <li>・ 牛頭天王祭</li> <li>・ マリンスコーレ</li> <li>・ 島市</li> <li>・ レディースラン</li> <li>・ 三宅高校三高祭</li> <li>・ WERIDE三宅島</li> <li>・ 愛らんどフェア</li> <li>・ アイランダー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 青年団</li> <li>・ 教育委員会</li> <li>・ 三宅村商工会</li> <li>・ 三宅島ネイチャーガイド</li> <li>・ 三宅島フリークライミングクラブ</li> <li>・ 船客待合所</li> <li>・ カフェ</li> <li>・ 御蔵島会館 (三宅島大校本校舎)</li> <li>・ アカコッコ館 (三宅島自然ふれあいセンター)</li> <li>・ 伊豆避難施設</li> <li>・ 三宅村公民館</li> <li>・ 温泉 (ふるさとの湯)</li> <li>・ 三宅島郷土資料館</li> <li>・ 三宅村立図書館</li> <li>・ クライミングジム (坪田体育館)</li> </ul>

表1:三宅島の地域資産

三つの観点から、三宅島の(潜在的な)「資産」をリストアップしたものである。ただし、これらの三つの分類設定が、相互に排他的ではなく、重複しうるという点には注意が必要である。また、この内容は網羅的ではなく、私たちが「三宅島大学」プロジェクトをすすめる過程で、逐次更新されてきたものである。以下では、三つの観点について、簡単に概観しておこう。

まず「個人の属性・能力」として考えておくべきなのは、私たちが一般的に「アクター」と呼んでいる(プロジェクトへの)参加者・関与者たちである。「三宅島大学」の場合、とくに交流やコミュニケーションを重視しているので、島内の人びとのみならず、島外から訪れる人びとも参加者・関与者として位置づけておくことが重要だった。「三宅島大学」の成り立ちについて説明をする際、これが誰のためのプロジェクトなのかを問われることが多かった。「大学」は、島内外を問わず、表1に記載されている多様な属性や能力をもつ人びとが、出会うための仕組みとして理解することができる。島内の人どうしであっても、生活リズムや日常の行動範囲がちがうために、一緒に活動する機会がない場合も少なくない。「大学」は、隣人との出会いや再会を実現する場所でもある。

「地域における集まり」は、「大学」のカレンダーを設計するうえで重要である。言うまでもなく、「大学」は講座のための時間・空間だけで成り立つものではなく、学ぶ人・教える人の日常生活とともにある。そのため、「三宅島大学」の学事日程と、地域のイベントとの連携は

欠かすことができなかった。実際には、「大学」の講座と、島の定例イベントとの連携は必ずしも円滑にすすんだとは言えない。たとえば二〇一二・二〇一三年度に実施した「キッズリサーチ」は、島の子供たちのために提供するプログラムだった。村からの提案で企画・実践したにもかかわらず、小・中学校の学事日程と、「大学」の学事日程との調整が行われていなかった。そのため、実際にプログラムが動き出しても、「キッズリサーチ」への参加者がなかなか集まらないという結果になってしまった。

「地域の組織・施設」は、「大学」としてプロジェクトを運営するためには、とくに重要であった。たとえば「ネイチャーウォーク」のように、三宅島の自然を活かして行われる講座もあるが、やはり拠点をもつことで、「大学」としての機能は強化される。二〇一二年度からは「三宅島大学 本校舎（御蔵島会館）」の運用がはじまり、プログラム運営の利便性が向上するとともに、「大学」そのものの認知度も高まったようだ。また、船の往来によって、島のリズムが刻まれていることをふまえると、船客待合所は、定期的に人が集まる場所として利用度の高い施設だと考えられる。さらに、たとえば竹芝客船ターミナルも、三宅島との行き来に利用する施設であるため、「三宅島大学」のエクステンションとして位置づけることができる。地域の「資産」としての組織や施設を考えると、その地域に限定することなく、行路（航路）や、他の地域に拠点をもつ関係組織・施設へと視野を広げることも重要だろう。

### 拠点の重要性

『アートプロジェクト―芸術と共創する社会』（二〇一四）の冒頭に、「アートプロジェクトとは」というページがある。たとえば、「制作のプロセスを重視し、積極的に開示」すること、「プロジェクトが実施される場やその社会的状況に応じた活動を行う、社会的な文脈としてのサイト・スペシフィック」であることなどが、一九九〇年代以降に展開されてきた「アートプロジェクト」の特徴として挙げられている。

「三宅島大学」は「調査・研究」「講座・行事」「環境・設備」という三つの活動領域によって構成されていた。「アートプロジェクト」という方法で、将来的に三宅島の「資産」としての価値を生み出しうる、さまざまな「資源」について探究する試みであった。島全体が「大学」に見立てられていたものの、現実的にも象徴的にも「校舎」の存在は重要である。現場の文脈を考えながら、積極的にプロセスをオープンにする（オープンにし続ける）ための「場所」が必要だった。

「三宅島大学」の前身である「ぼくとうだいがく墨東大学」も、ささやかながら拠点を持っていた。墨田区京島のキラキラ橋商店街にある空き店舗が、「墨東大学 京島校舎」と呼ばれ、さまざまな講座の

ための教室として、さらには卒業式や卒業制作展のための会場として利用された。「プロセスを重視する」ということでは、引越しや壁のペンキ塗りといった拠点整備の活動自体も、「講座」として提供した。

「三宅島大学」プロジェクトでは、最初の数回は民宿を利用した。私たちも不勉強だったのだが、島のリズムは、船の往来と密接に連動している。明け方五時に船が着き、午後二時に船が出る。これが基本になって、島の活動が組み立てられている。「島時間」ということばから連想しがちな、のびやかな時間感覚というよりは、むしろ規則的だと言ったほうがいい。私たちが常識的だと思っている時間の使い方は、通用しない。私たちは、つい宵つ張りな過ごし方を求めているのだが、早寝早起きが基本だ。その理解不足で、民宿にはいささか迷惑なふるまいをしてしまった。

いずれにせよ、「三宅島大学」の拠点として、民宿を使い続けるわけにはいかない。数回のリサーチを経た後、伊豆地区にある「伊豆避難施設」を利用できるよう調整が行われ、初年度（二〇一一年度）は、この避難施設が「三宅島大学」の活動拠点となった。「避難施設」であるから、民宿よりも柔軟に使うことができる。ただ、実際に講座や行事は、「アカコッコ館（三宅島自然ふれあいセンター）」や「三宅村公民館」など、他の会場を利用する必要があり、そのつど「三宅島大学」の事務局機能も移動することになった。

二年目（二〇一二年度）からは、阿古地区にある「御蔵島会館」を「三宅島大学 本校舎」として活用できるようになった。錆が浜港から徒歩五分程度という好立地で、近所には観光協会や商店もある。くわえて、村役場へのアクセスも良い。宿泊や自炊のための設備は、私たちの滞在中の自由度を格段に高めてくれた。広間には天井まで届く黒板が設置され、教室らしい雰囲気になった。「三宅島大学」と書かれた看板ができて、ようやく「居場所」ができた。少しずつではあったが、「本校舎」を拠点に「三宅島大学」における活動のスタイルがつけられていった。

#### コミュニケーションが「場所」をつくる

「三宅島大学」をひとつの生態系として考えるところならば、それを構成するのは教室や校舎といった有形のモノだけではない。言うまでもなく、さまざまな無形のコトも有機的に結びつくことによって「全体」がかたどられていく。「三宅島大学」プロジェクトにとって重要なのは、空間としての拠点ができたことではなく、「マネージャー」が常駐するようになったという点である。たとえば教室という空間は、コミュニケーションをおして息づく。人びとが集い、自由闊達に語り合うことによって、「居心地のいい場所（グッド・プレイス）」ができる。

二〇一二年の夏以降、「三宅島大学 本校舎」に「マネージャー」が暮らすようになり、(大学をめぐる)生態系は、広がりを持ちはじめるとともに、安定していった。「マネージャー」は、村役場との調整をしながら講座や行事の運営をサポートする「事務局」であり、逗留するアーティストや関係者を迎える「おかみさん」であり、同時に村の人びとに「三宅島大学」の活動内容を伝える「広報担当」のような存在であった。

「三宅島大学」を構想した際に整理したコンセプトのひとつが、「コミュニケーションを誘発するしくみ」としての「三宅島大学」というものであった。これは、「アートプロジェクト」の評価にもかわるが、私たちは、「三宅島大学」の意味や意義は、人びとのコミュニケーションに表れるという考えに依拠しながら「全体」をデザインした。人びとの日常会話のなかに、「三宅島大学」や大学生生活にかかわることばが表れるときにこそ、「三宅島大学」の存在が認知されたと考えることができるからだ。

二〇一一年の「開校式」以降、さまざまな場面で、「三宅島大学」が(内容の詳細はともかく、その名前程度は)、村の人びとに知られているということがわかった。とくに二〇一二年夏に実施した「キッズリサーチ」をとおして、子供たちのコミュニケーションのなかに「三宅島大学」の存在を実感することができた。当初は、「三宅島大学」を略して「三宅大(みやけだい)」という呼称が流通するのではないかと期待していたが、子供たちは、「三大(さんだい)」と口にするようになった。また、子供たちは何気なく「大学に行ってくる…」と言って家を出ていくと聞く。

「キッズリサーチ」に参加していた子供たちにとって、「三宅島大学」が「本物」であるかどうかは、問題ではない。コミュニケーションを誘発するしくみとして、その本質が「真正」であるということが大切だ。「三宅島大学 本校舎」は、プロジェクトのためにあたえられた呼称だったが、「大学」として語り、足をはこぶことで、子供たちも「アートプロジェクト」への参加者になっていたのである。

#### 仲介者・媒介者としての「島外島民」

三宅島には、豊かな「資産」がある。ABCDAプロトでは、地域「資産」をマッピングした上で、それらを「モビライズ(mobilize)する」というプロセスを提唱している。つまり、所与の「資産」を選んだり組み合わせたりして息づかせ、あたらしい価値の創造を試みるのである。それは「ニーズ主導」ではなく、「可能性志向」にもとづいている。「三宅島大学」プロジェクトでは、さまざまな「資産」を有機的に結びつけるために、拠点整備や既存のイベントなどとの連携を試みたが、その推進役を担うのは、何よりも「人」であった。つまり、人びと



のコミュニケーションこそが、「資産」どうしの関係をつくり、いきいきとした「大学」の姿をかたどると考えていたのである。

この発想は、開校当初から「誰もが学生、誰もが教員」「自分の師匠は自分で探す」といったコンセプトで表現してきた。それをもっともわかりやすい形で具現化したのが、開発好明さんの『一〇〇人先生』であろう。アーティストとして、またマネージャーとして三宅島に寄留していたことが、あたらしい出会いを生み、闊達に語らう場所をつくった(註4)。

当初から、「三宅島大学」プロジェクトは、「可能性志向」で構想されていたが、「資産」をマッピングする際には、「内(島民)」と「外(よそ者)」という構図で島を見ていた。「内」でも「外」でもない島民、あるいは「内」と「外」とを行き来することのできる島民がいることを実感できるようになったのは、じつは二年目の後半以降であった。たとえば、東京都の三宅支庁や保健所の出張所、学校などに勤めるのは、「内(島民)」と「外(よそ者)」の間にいる人びとである。異動で島の「内」に入るが、数年の任期を経て、ふたたび「外」に出ることが、あらかじめわかっている。数年間だけの「寄留者」たちが、つねに一定数、三宅島で暮らしているのだ。もちろん、前任者からの引き継ぎはあるはずだが、島での生活に役立つ情報を求める意欲は高い。当然のことながら、趣味の領域を広げたり、あらたに人と出会ったりする機会には積極的に参加する。「三宅島大学」への関与者・参加者として、重要な位置を占めていた

のは、こうした「島外島民」であった。

もうひとつ特筆すべきなのは、メディアへの接触度が高い島民たちの存在である。三宅島では、火山の噴火による災害時に備えて、各戸に情報端末が附設されている。村役場の広報・広聴活動は、この端末を介しておこなわれている部分もあるが、ケータイやスマートフォンは、都市部と変わらず利用度が高いようだ。

「三宅島大学」プロジェクトについては、二〇一一年からウェブサイトを介して講座・行事の情報を提供し、TwitterやFacebookでも逐次情報を公開してきた。パンフレット(大学案内)や『三宅島大学通信』は、紙媒体として流通した。また、不定期ではあるものの、加藤研究室で『あしたばん』というかわら版を発行し、民宿や商店などで配布するとともに、インターネットを介してダウンロードできるようにしてきた。新聞や雑誌記事にも「三宅島大学」の試みは何度か取り上げられ、「島外」からの目線で、ラジオのFM番組が企画されることもあった。

こうした状況のなか、メディアに対する感度もリテラシーも高く、TwitterやFacebookなどのソーシャルメディアを能動的に活用しながら「外」とのつながりをつくらうとしている島民がいる。自らの生活環境を日常的に相対化しつつ理解しているという点で、「島外島民」的な性格をもっていると言えるだろう。「外」から嫁いだ宿のおかみさん、Uターンした島民も、同様に「島外島民」的な存在である(註5)。

じつは、こうした「個人の属性・能力」は、最初は認識できていなかった。私たちが「島外」からアプローチし、「島内」の人びとの交流・交歓の場をつくるという、いまふり返ると、いささか単純な図式でとらえていたためである。プロジェクトがすすむにつれ、実際に「島外島民」ということばを聞くにいたった。「島外島民」は、「島民」と「よそ者」との間に立つ、仲介者・媒介者としての役割を担いうる存在である。「三宅島大学」プロジェクトにおいては、コミュニティの成員と、ゲスト・観光客という構図ではなく、「島外島民」という一時的に住まう「寄留者」の存在を考慮することが重要であった。

結果として、二年半ほどの開校期間に所定の単位を取得し、「三宅島大学」を卒業



図3

したのは、いずれも「島外島民」（広い意味での「島外島民」をふくむ）であった。また、二〇一四年三月九日の「閉校式」で、「三宅島大学」の休校を惜しみ、何らかの形で今後も情報発信に携わりたいという意欲を見せていた人の多くは、「島外島民」だった。

### 「鉢植え」か「切り花」か

近年、「コミュニティデザイン」と呼ばれる領域が注目を集めている。人によって、その定義も理解の方法もちがうはずだが、多くの場合、地域を活性化する試みが、コミュニティに根づく活動へと展開することを目指しているように見える。典型的なのは、「外」からの目線で地域を評価・再評価し、コミュニティに対する考え方や方法を、「内」の人へ伝えるというやり方である。フィールドワークやワークショップをとおしてアイデアを整理し、実現可能な提案へと結びつけることを目指す。ここでは、さまざまな立場の「アクター」が主体的にかかわることによって、課題を解決していくというシナリオが描かれる。

「外」からの関与者・参加者が、プロジェクトをすすめるうちにその地域に惚れ込んで、移住を判断するというケースもあるが、数年間かけて「コミュニティデザイン」の考え方やノウハウを根づかせて、少しずつ離れていくというアプローチを取ることが多い。たとえば、地域

住民たちがNPO法人をつくれれば、さまざまな形で地域固有の「資産」を継続的に運用していくことが可能となる。何より、その地域に暮らす人びとが活動の主役になれば、当事者意識をもってプロジェクトを続けていくにちがいない。

「三宅島大学」も、これに類似したアプローチを想定していた。島全体を「大学」に見立てるといふ仕組みにもとづいて、「誰もが学生、誰もが教員」というコンセプトを浸透させれば、やがては島民たちが自律的にかかわって行くようになるかと期待していた。つまり、少しずつ「資産」の組織化の方法を根づかせていくというモデルだと言える。

だが、「三宅島大学」プロジェクトをとおして、もうひとつのモデルの存在が見えてきた。上述のような、地域に根づかせることへの志向を「鉢植え」にたとえるならば、もうひとつのモデルは「切り花」のような感覚でとらえることができる。「鉢植え」は少しずつ育てて、頃合いを見て、その土地に直接根を張るように植え替える。いっぽうの「切り花」は、花瓶のなかでしばらく花を咲かせるが、そもそも根はない。

「鉢植え」か「切り花」か。「鉢植え」も「切り花」も、私たちの暮らしを彩るといふ点では同じだが、つきあい方も育て方もちがう。まず、「鉢植え」なコミュニティへのアプローチには、時間的なゆとりが必要になる。中長期的なヴィジョンをもって、プロジェクトが根を張るまで、丁寧に見届ける覚悟が求められる。結論を急ぐことは、禁物だ。とりわけ教育的な観点からプロジェクトをデザインするのであれば、未来への投資という意味でも腰を据えてつきあわなければならぬ。いっぽう、「切り花的」な発想は、わかりやすさが特長である。成長の幅（可能性）はあらかじめ想定されているので意外性には乏しいが、その分、安心してつきあうことができる。重要なのは、「鉢植え」でも「切り花」でも、私たちの成長にかかわるモデルを考えるのであれば、それぞれの特質をよく理解して、丁寧に向き合わなければならないという点だ。そもそも、自分たちの生活を彩る気持ちがなければ、はじめまらない。「鉢植え」も「切り花」も、お金さえあれば手に入ると考えがちだが、いづれもたんなる使い捨ての飾りではないはずだ。手入れをしなければ、すぐに枯れてしまうのは当然のことなのである。

### 「三宅島大学」とは何だったのか

これまで、二つの観点から「三宅島大学」プロジェクトをふり返ってきた。ひとつは、コミュニティや地域の理解を試みる際の方法にかかわる観点である。私たちは、日頃から「問題解決」のためにプロジェクトを構想することが多い。その場合、コミュニティや地域への関与は、課題に直面している「クライアント」と、課題の解決を試みる「専門家」という図式で理解される。A B C Dアプローチは、そうした「ニーズ主導」の考え方に対して、「可能性志向」に

もとづく理解の方法を提案している。

もうひとつは、プロジェクトを広げていく際の考え方や、時間にかかわるヴィジョンである。地域における活動を、時間をかけて少しずつ根づかせていくのか、それともイベントのように即時的に消費するのか。これについては、「鉢植え」と「切り花」にたとえながら論じてみた。これらをふまえると、やや粗削りではあるものの、図4のように〈ニーズ主導⇨可能性志向〉(鉢植え的⇨切り花的)というふたつの軸で、地域活動のありようを整理することができる。

短期的に、つまり「切り花的」に「ニーズ主導」のプロジェクトをすすめる場合には、当然のことながら、即時的な結果が要求される(図中左下)。そして、課題が明確であ

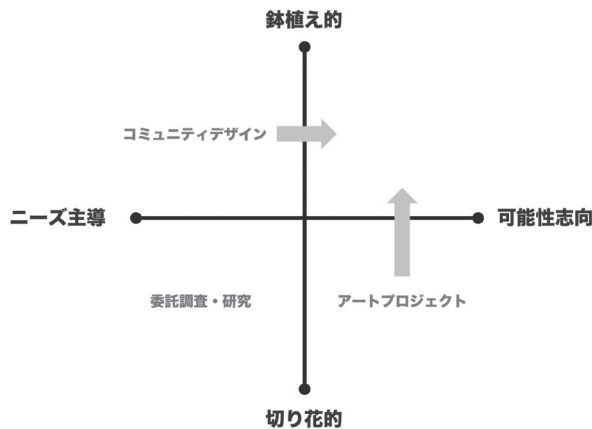


図4:「三宅島大学」を性格づける

ばあるほど、目標への到達度は評価しやすい。あらかじめ明示されていたニーズが、決められた時間・コストのなかで満たされたかどうかが重視されるため、現場でのあらたな気づきや、想定外の発見は関心の「外」に位置づけられることになる。委託調査・研究や自治体等が主導する年度ごとの事業は、こうした文脈において実現することが多く、より厳密な意味での「契約関係」を維持しやすいと言えるだろう。

多様な実践があると思うが、「コミュニティデザイン」と呼ばれる領域は、典型的にはこの図の左上に位置づけることができるだろう。ある程度の時間をかけて、人びとのつながり方・かわり方をデザインし、コミュニティや地域の課題解決を試みる。ワークショップなどをとおして、あたらしい課題が明らかになれば、中長期的な計画のなかに取り込んで、位置づけることもできる。

私が「アートプロジェクト」に関心をもち、面白さを感じているのは、それが(ABCDアプローチを持ち出すまでもなく)本質的に「可能性志向」だからである。単発的に(「切り花的に」)実施されるプロジェクトが多いようにも見受けられるが、アーティストによる創作活動は、なんらかの明快なニーズに応えるためではなく、コミュニティや地域での発見や気づきによって突き動かされている。その意味で、つねに実験的・探索的である。もう一歩すすんでいえば、既成のニーズを創造的に破壊することこそが、「アートプロジェクト」が果たすべき役



割なのだ。その精神を象徴するのが、二〇一一年六月に実施された「三宅島リサーチ」だ。総勢三〇名近くで三宅島に渡り、一週間近く滞在した。それぞれが三宅島を巡って（というより、島に放たれたという感じだろうか）、滞在期間中に「何か」を発見することがミッションだった。最終日には、簡単な成果報告もおこなわれることになっていった。参加者たちは、一人ひとりの感性と方法を駆使して、「何か」をつかもうとした。その経験が、「三宅島大学」の理念をかたどった。

もちろん、こうした「可能性志向」によるかかわり方は、残念な結末を迎えることもありうる。さまざまな「資産」をつなぎ、何かを生み出すことを試みるのが基本だが、そもそも「資産」に乏しい場合はどうなるのか。あるいは、うまくつながりをつくれなかったときは、どう考えればよいのか。「可能性志向」で推進するプロジェクトの評価は、容易ではない。

「三宅島大学」は、「可能性志向」を意識しながら、長きにわたって活動を根づかせていくことを目指すものだった。私たちは、このプロジェクトによって、「コミュニティデザイン」や「アートプロジェクト」が向かいはじめている、あたらしい領域を目指していた（図中右上）。この三年間で、まだ名前をあたえられていない、あたらしい領域の開拓に、着手できたのかもしれない。

おわりに

「三宅島大学」は、私たち自身が学ぶための場でもあった。私だけではなく、実行委員会のメンバーにも、教育関係者が何名かふくまれていた。少しずつではあったが、「三宅島大学本校舍」に生活感が漂いはじめていたこと。そして、子供たちが、「三大（さんだい）」と口にしながらか集まってきたこと。このささやかな変化を見るだけでも、確実に三宅島の「資産」がつつながりはじめていたことを実感できた。そのようすを、なぜひと目でも見ようとしなかったのだろう。現場を熟知することこそが、成長へのよき源泉ではなかったのか。

わずか三年で閉じる「大学」など、聞いたことがない。一人の教育者として、もう一度、「三宅島大学」にかかわったすべての人に聞きたい。私たちは、このプロジェクトをとおして何を学んだのか。変化を拒み、あたらしい挑戦から目を背けると、私たちの可能性は閉ざされる。「島でまなび、島でおしえ、島をかんがえる。」という理念のもとに集い、「三宅島大学」の大きな旗を風になびかせたのは、いったい誰だったのか。もうしばらく、自問したい。

## 参考文献・サイト

- Bock (加藤文俊・岡部大介・木村健世) (編著) (二〇一〇) 『墨東大学の挑戦―メタファーとしての大学』墨東大学出版会 (香川文・中島和成) <http://bokudai.neu/>
- 加藤文俊 (二〇一〇) メタファーとしての〈大学〉―地域資産を評価するコミュニケーションのデザイン『地域活性研究』第2号 (17～24頁)
- Kreitzmann, J. and McKnight, J. (一九九三) Building communities from the inside out: A path toward finding and mobilizing a community's assets. Shaker. ACTA Publications.
- 熊倉純子 (監修) (二〇一四) 『アートプロジェクト―芸術と共創する社会』水曜社
- ギルバート・ライル (一九八七) 『心の概念』みすず書房

## 註

註1 Kreitzmannらによる記述はアメリカにおける事情を前提としているため、訳出する際に日本の文脈に合わせて加筆・修正した。ここで重要なのは、記載されているキーワード自体ではなく、問題状況のスケールや抽象度に応じてニーズにもとづくマッピングが行われるという点である。

註2 地域における「資産」に着目する発想においても、日本の文脈に応じて、適宜改訂しながら訳出した。たとえ

ば海外諸国における文脈では、エスニック・グループによる集い、教会等での集いなど、地域コミュニティにおける集まりにはいくつものパリエーションがある。また、図ではスペースの都合で割愛したが、Kreitzmannらのマッピングでは、障がい者をはじめとする社会的参画が難しいと理解されがちな人びと (labeled people) の属性・能力も記載されている。文中の図は、網羅的なものではなく、いくつかのスケールで地域における「資産」を列挙する事例として用いている。

註3 コミュニティ・カレッジはアメリカの公立・州立の二年制大学であり、日本の文脈にはややなじみにくい。地域コミュニティの住民に高等教育を提供する組織・施設として理解すれば、類似の機能を果たす (果たすべき) 存在として本論のストーリーに位置づけることができるはずである。

註4 「一〇〇人先生」については、別途冊子にまとめられている。「三宅島大学」のウェブサイトで経過等を読むことができる。 <http://miyakejima-university.jp/>

註5 ここでいう「Uターン」には注意が必要かもしれない。三宅島は、火山噴火にもなう全島避難を経験しており、その意味では、全員が「Uターン」だと考えられるからである。「島外島民」的な「Uターン」は、一般的な意味どおり、「外」での暮らしを経て、島に戻った人のことを指す。





三宅島大学

閉校式を終え島を去るメンバーを見送る、島の人びととマネージャー

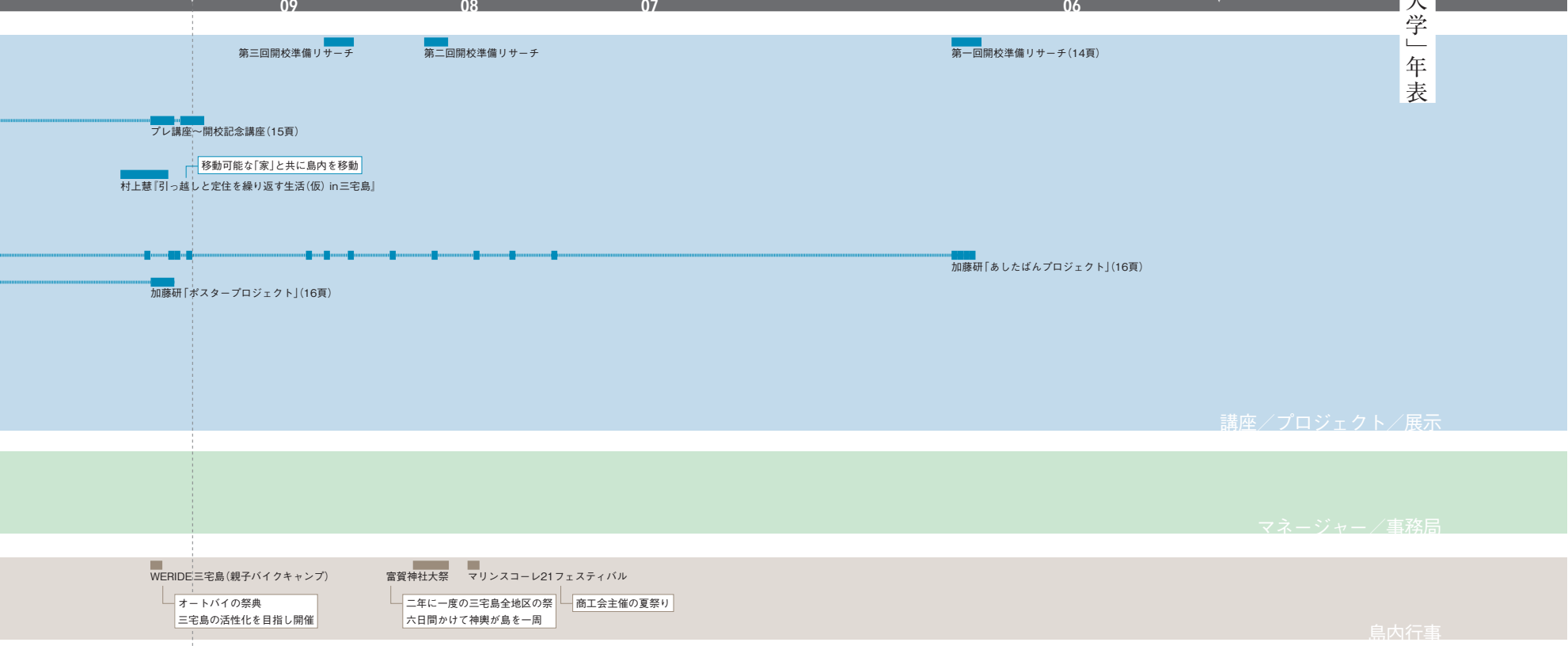


「三宅島大学」年表

2011

三月中旬  
森司、各所へ参加を打診  
誘い文句は  
「島に行きませんか？」

九月二十九日  
「三宅島大学」開校式  
(15頁)





2011年度所感 初年度は、とにかく知らないことばかりで、島に出かけるたびに驚きや発見があった。数回のリサーチを経て迎えた「開校式」の華やかさが印象に残っている。まだ勝手がわからないながらも、冒険心に満ちたスタートだった。少しずつ、六時間半の船旅にも慣れた。(加藤)

# 2012

03

02

01

12

11

10

EAT&ART TARO「Welcome Coffee」

島外からの来島者に港でコーヒーをふるまい、もてなす

通常講座

EAT&ART TARO「カフェ三宅島」(17頁)

加藤研「あしたばんプロジェクト」

加藤研「ポスタープロジェクト」

加藤研「ポスタープロジェクト」展

「三宅島レディースラン」会場での展示

講座／プロジェクト／展示

マネージャー／事務局

三宅島レディースラン

島の女性たちによる  
手づくりのランイベント

船祝い

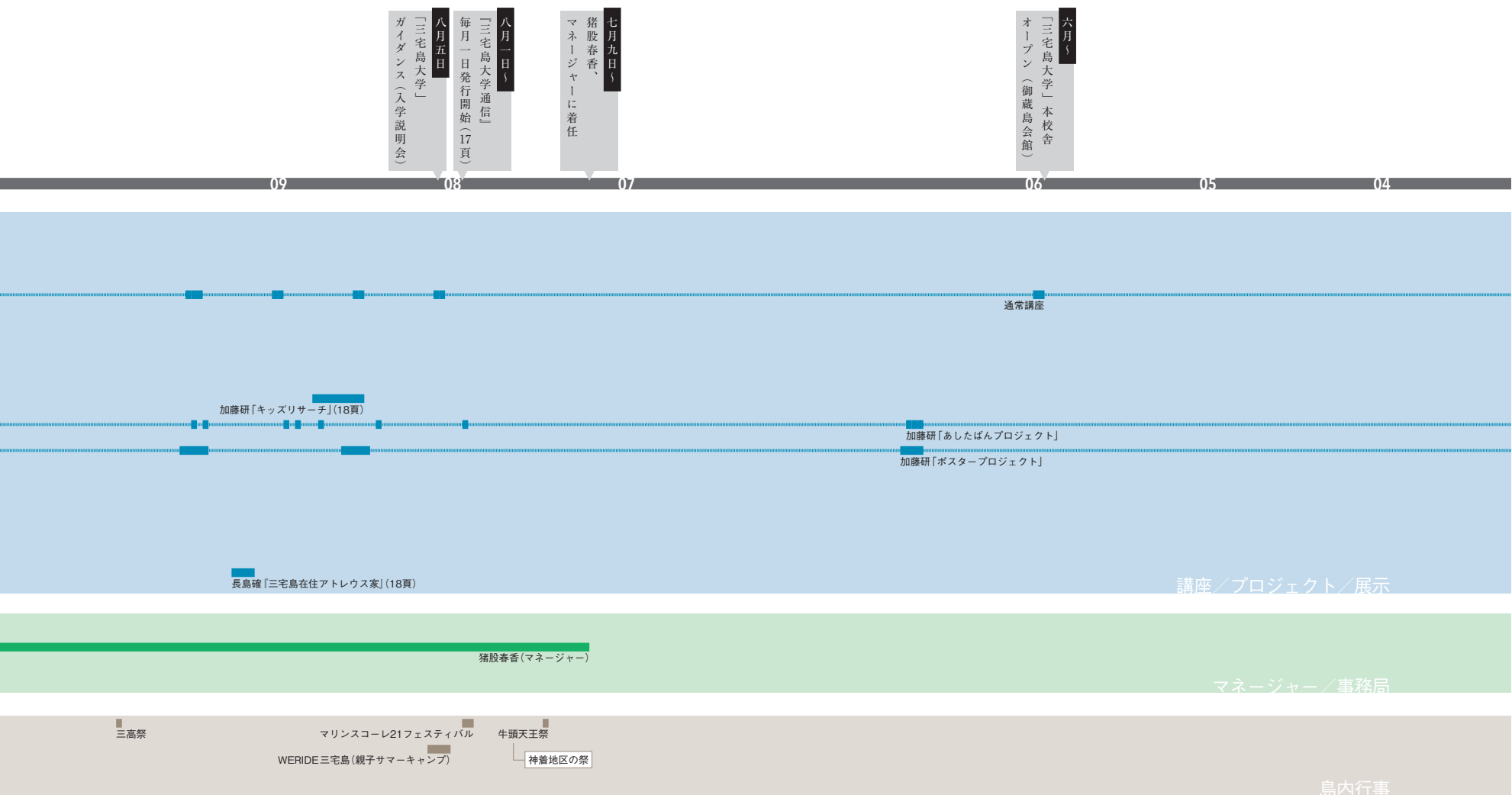
一年の豊漁と  
安全を祈願する祭

WERIDE三宅島(エンデュアロレース)

島内唯一の高校・都立三宅高校の文化祭

三高祭

島内行事



09

08

07

06

05

04

通常講座

加藤研「キッズリサーチ」(18頁)

長島唯「三宅島在住アトレウス家」(18頁)

加藤研「あしたぼんプロジェクト」

加藤研「ポスタープロジェクト」

講座／プロジェクト／展示

猪股春香(マネージャー)

マネージャー／事務局

三高祭

マリンスコール21フェスティバル

牛頭天王祭

WERIDE三宅島(親子サマーキャンプ)

神着地区の祭

島内行事

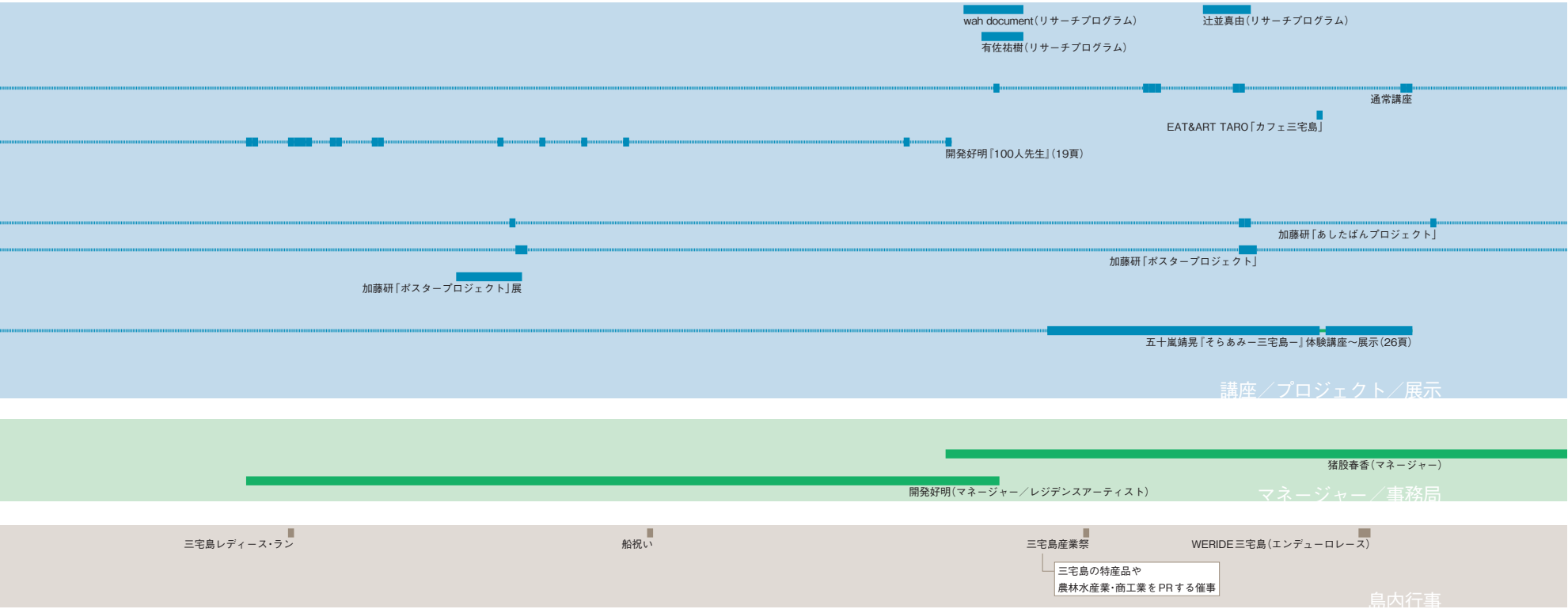
三月九日(十日)  
「三宅島大学」  
オープンキャンパス

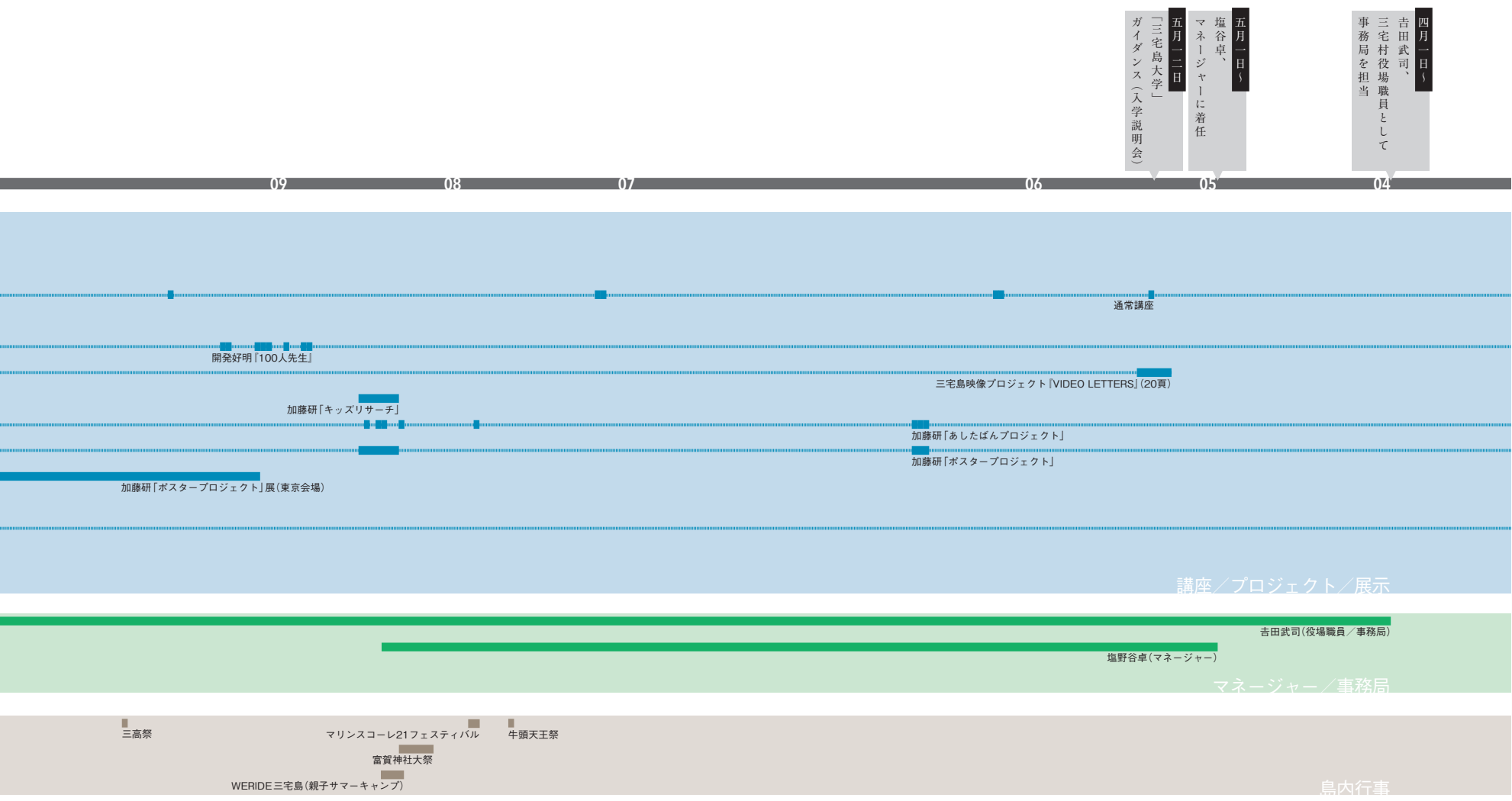
2012年度所感 二年目に入り、御蔵島会館を「三宅島大学 本校舎」として利用できるようになった。拠点にくわえて、マネージャーが常駐するようになり、ようやくプロジェクトが本格的に動き始めたことを実感した。なかでも、夏休み中に実施した「キッズリサーチ」は思い出ばかい。(加藤)

二月一日(五日)  
開発好明、  
マネージャー兼  
レジデンスアーティ  
ストとして滞在開始

# 2013

03 02 01 12 11 10







三月九日  
第二期卒業証書授与式・  
「三宅島大学」閉校式  
(21頁)

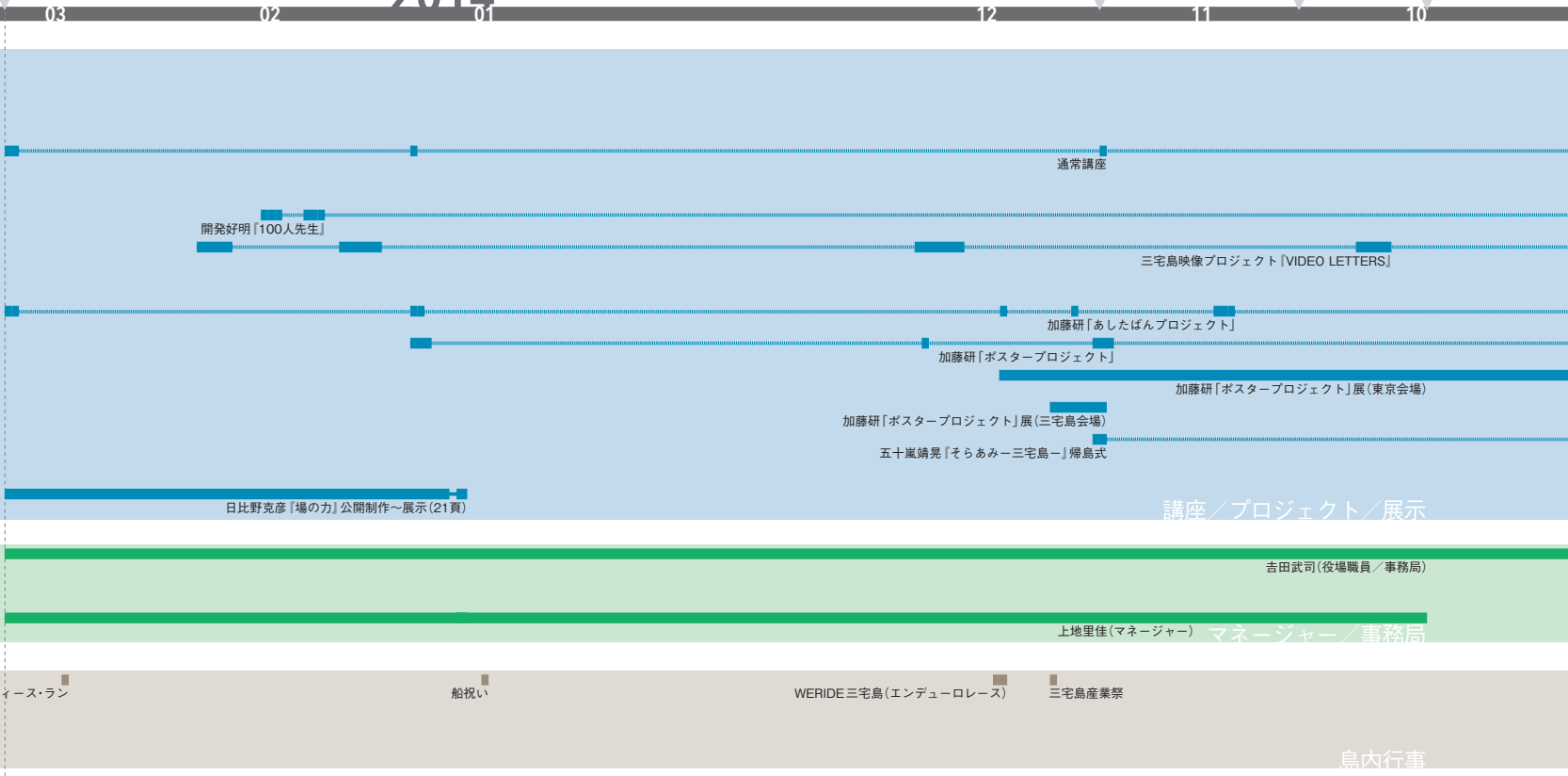
2013年度所感 さまざまな講座やリサーチをとおして、少しずつ成果が形になりはじめた。たとえば「一〇〇人先生」によって、「三宅島大学」の認知度は高まった。「ポスタープロジェクト」も、島内外での展示が実現した。そして、ついに「三大」から卒業生を輩出することになった。(加藤)

# 2014

十一月十七日  
第一期卒業証書授与式  
(20頁)

十月十九日  
「三宅島大学」  
ポルダリングカップ

十月一日  
上地里佳、  
マネージャーに着任



2012年度

<講座・行事>

クラシックコンサート(北村さおり/奥村多絵子/五味こずえ/菅野太雅/直井亮)/島初心者のためのおき島ぼなし(中山吉人)/三宅島大学ガイダンス(入学説明会)(猪股春香/上地里佳/長島確)/三宅島ネイチャーウォーク(西村ひとみ)/いろいろな地図・それぞれの地図(長島確)/マネージャートーク【三宅島のひと】(神山雄一)/「キッズリサーチ」をふり返る(加藤文俊研究室)/三宅島ポスタープロジェクト(加藤文俊研究室)/島をあるく・人に出会う・島をかながえる(スザンネ・クリーン)/「社会調査」で見る三宅島(加藤文俊研究室)/そらあみ・三宅島-(五十嵐靖晃)/わたしだけの三宅島染め(野澤多恵)/手づくりの三宅島記念品(野澤多恵)/三宅島カフェ(EAT&ART TARO)/キッズと一緒に「ゲイジツの秋」(加藤文俊研究室)/魅力ある(場所)について考える(長岡健)/「ワークショップ」ってなんだろ? (加藤文俊研究室/長岡健)/星空コンサート(穴原甲一郎/ダダリズム)/初めてのとんぼづくり(馬着あゆみ)/三宅島ネイチャーウォーク(西村ひとみ)/アーティスト紹介講座・マネージャー報告会(開発好明/wah document)/有佐祐樹/猪股春香

<アーティスト滞在プログラム>

「そらあみ -三宅島-」(五十嵐靖晃)/「100人先生」(開発好明)

<調査・研究>

三宅島大学キッズリサーチ/三宅島ポスタープロジェクト/あしたばんプロジェクト(いずれも加藤文俊研究室)

<リサーチプログラム>

辻並真由/有佐祐樹/wah document

<拠点・整備>

三宅島大学本校舎通常開館(猪股春香/開発好明)

「三宅島大学」実施概要

- 主催:東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)/三宅島大学プロジェクト実行委員会/三宅村
- 協力:東海汽船株式会社
- 参加者数:2011年度:1,380人/2012年度:延べ1,005人/2013年度:24,749人(講座・行事参加者1,057名/本校舎・展覧会来場者23,692名)
- 学長:平野祐康(2011年度)/櫻田昭正(2012年度/2013年度)
- 副学長:加藤文俊
- 教授:日比野克彦
- 三宅島大学マネージャー:猪股春香/開発好明/塩野谷卓/上地里佳
- 三宅島大学プロジェクト実行委員会事務局:吉田武司(三宅村役場総務課庶務係主事)
- 東京文化発信プロジェクト室:森司/大内伸輔/長尾聡子/芦部玲奈

2011年度

<開校準備リサーチ>

- リサーチヤー:  
EAT & ART TARO/飯田達彦/五十嵐靖晃/上地里佳/上地由衣/大西未希/金沢宏紀/川瀬一絵/喜多直人/佐藤悠/新創麻友/高木静香/長島確/長富将成/中西要介/西澤徹夫/橋本匠/松田唯ヨ/三島麻里江/村上慧/森部綾子/安野太郎/山城大督/吉岡理恵/吉田あんな

<講座>

校旗をつくろう(松田唯)/楽焼きワークショップ(金澤宏紀)/島でまなび、島でおしえ、島でかながえる(加藤文俊)/Rock'n'Dive(日比野克彦)/溶岩ダンスワークショップ(近藤良平)/ポスターをつくろう(まちに還すコミュニケーション)(加藤文俊研究室)/かわらばんをつくろう(加藤文俊研究室『あしたばん』編集部)/定住と引っ越しを繰り返す生活(仮)in 三宅島(村上慧)/坪田の言葉を聴こう(山本マリ子/加藤幸子)/史跡と文化を知ろう(窪寺昇)/SUPER MOVIE CLASS(山城大督)/遠藤一郎 風揚げプロジェクト(遠藤一郎)/クラシック講座(カノン音楽教室)/島市への参加/カフェ三宅島(EAT&ART TARO)/応援学:応援旗をつくろう(遠藤一郎)/語り講座(平野啓子)/ポスターをつくろう(まちに還すコミュニケーション2)(加藤文俊研究室)/三宅島クッキーをつくろう(加藤文俊研究室)/キャンドルをつくろう(加藤文俊研究室)/魚を捌こう(木村吉行)/史跡と文化を知ろう2(窪寺昇)/坪田の言葉を聴こう2(山本マリ子/加藤幸子)/Welcome coffee(EAT&ART TARO)/ポスター展示(加藤文俊研究室)

## 「三宅島大学誌」実施概要

### <伊豆三島リサーチ>

- 2014/7/23(水)～27(日)  
加藤文俊／奥麻実子／森部綾子／飯田達彦／深澤匠／吉田武司

### <三宅島リサーチ>

- 2015/1/10(土)～12(月)  
参加者:加藤文俊／奥麻実子／森部綾子／飯田達彦／吉田武司

### <公開研究会>

- 2014/10/4(土) 東京文化発信プロジェクトROOM302にて

### <インタビュー>

- 2014/9/8(月) 東京文化発信プロジェクトROOM302にて  
西澤徹夫さん／安野太郎さん／長島唯さん／五十嵐靖見さん  
／猪股春香さん
- 2014/10/6(月) 東京文化発信プロジェクトROOM302にて  
EAT&ART TAROさん
- 2014/11/14(金) 東京文化発信プロジェクトROOM302にて  
山城大督さん
- 2015/1/9(金) GALLERY HASHIMOTOにて  
開発好明さん
- 2015/1/11(日) 三宅島・築穴製菓にて  
築穴美喜子さん／築穴一也さん
- 2015/1/11(日) 三宅島・カフェ691にて  
西村ひとみさん／田中耕介さん／沖山雄一さん
- 2015/1/12(月) 三宅島・三宅村コミュニティセンターにて  
島崎広光さん
- 2015/1/19(月) 東京美術館にて  
日比野克彦さん

### <編集会議>

- 2014/6/23(月)
- 2014/7/14(月)
- 2014/8/4(月)
- 2014/9/22(月)
- 2014/11/10(月)
- 2014/12/8(月) ほか

## 2013年度

### <講座・行事>

三宅島大学ガイダンス(塩野谷卓／吉田武司)／三宅島映像プロジェクト(山城大督)／島初心者のためのとっておき島ぼなし(中山吉人)／島初心者のためのとっておき島あるき(中山吉人)／これまでの「そらあみ」／これからの「そらあみ」(五十嵐靖見)／三宅島ネイチャーウォーク(西村ひとみ)／みんなの広場をつくろう(傍島浩美)／「防災のつどい」三咲順子の防災一人語り(三咲順子)／三宅島ポスタープロジェクト「はたらくオトコたち」報告会(加藤文俊研究室)／慶應義塾大学加藤文俊研究室「卒業プロジェクト発表会」(青山大毅)／後片付け／卒業式・閉校式

### <アーティスト滞在プログラム>

「100人先生」(開発好明)／三宅島映像プロジェクト「VIDEO LETTERS」(山城大督)／有佐祐樹／戸館正史／富田了平)／日比野克彦公開制作・個展「場の力」(日比野克彦)

### <三宅島大学開校2周年記念事業>

三宅島ポスタープロジェクト展／三宅島大学ポルダリングカップ／五十嵐靖見「そらあみ -三宅島-」／三宅島大学卒業制作成果発表会・卒業証書授与式

### <調査・研究>

三宅島大学キッズリサーチ／三宅島ポスタープロジェクト／あしたばんプロジェクト(いずれも加藤文俊研究室)

### <拠点・整備>

三宅島大学本校舎通常開館(塩野谷卓／上地里佳)

## 発行物

- 三宅島大学 平成23年度大学案内
- 三宅島大学 平成24年度大学案内
- 誰もが先生、誰もが生徒 三宅島大学の試み  
五十嵐靖見「そらあみ -三宅島-」を事例に
- 三宅島大学 平成25年度大学案内
- 三宅島大学通信全集
- あしたばん全集
- ドキュメント | 山城大督三宅島映像プロジェクト [VIDEO LETTERS]  
ビデオレター:7年後の「わたし」へ
- 三宅島ポスタープロジェクト
- 開発好明「100人先生」
- 五十嵐靖見「そらあみ -三宅島-」帰島式

## 三宅島大学誌

「三宅島大学」とは何だったのか

監修	加藤文俊
編・著	三宅島大学誌プロジェクト 加藤文俊／奥麻実子／森部綾子／飯田達彦／深澤匠 芦部玲奈／吉田武司(東京文化発信プロジェクト室)
デザイン	奥麻実子
印刷	株式会社グラフィック
発行日	平成27(2015)年3月20日
発行	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室 〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム两国5階 TEL:03-5638-8800 FAX:03-5638-8811 URL: <a href="http://www.bh-project.jp/">http://www.bh-project.jp/</a>

本プログラムは、「東京アートポイント計画」の一環として実施されました。

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

※ 「東京文化発信プロジェクト室」は、2015年4月1日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。





東京文化発信  
プロジェクト

